LuaIATEX-ja 用 jsclasses 互換クラス

LuaT_EX-ja プロジェクト 2014/05/14

目次

1 はじめに

これは奥村晴彦先生による jsclasses.dtx を LuaIAT_EX-ja 用に改変したものです。 次 のドキュメントクラス(スタイルファイル)を生成します。

〈article〉 ltjsarticle.cls 論文・レポート用

〈book〉 ltjsbook.cls 書籍用

〈jspf〉 ltjspf.cls 某学会誌用

〈kiyou〉 ltjskiyou.cls 某紀要用

ltjclasses と違うのは以下の点です。

■サイズオプションの扱いが違う ltjclasses では本文のポイント数を指定するオプションがあり ましたが、ポイント数は 10, 11, 12 しかなく、それぞれ別のクラスオプション ファイルを読み込むようになっていました。しかも、標準の 10 ポイント以外で は多少フォントのバランスが崩れることがあり、あまり便利ではありませんで した。ここでは文字サイズを増すとページを小さくし、TEX の \mag プリ ミティブで全体的に拡大するという手を使って、9 ポイントや 21, 25, 30, 36, 43 ポイント, 12Q, 14Q の指定を可能にしています。

1.1 jsclasses.dtx からの主な変更点

全ての変更点を知りたい場合は、jsclasses.dtx と ltjsclasses.dtx で diff を とって下さい。zw, zh は全て \zw, \zh に置き換えられています。

- フォントメトリック関係のオプション winjis は単に無視されます。
- 標準では jfm-ujis.lua (LuaT_EX-ja 標準のメトリック, OTF パッケージのものが ベース) を使用します。
- uplatex オプションを削除してあります。

- disablejfam オプションが無効になっています。もし
 - ! LaTeX Error: Too many math alphabets used in version ****. のエラーが起こった場合は、lualatex-math パッケージを読み込んでみて下さい。
- papersize オプションの指定に関わらず PDF のページサイズは適切に 設定されます。
- LuaT_EX-ja 同梱のメトリックを用いる限りは、段落の頭にグルーは挿入されません。 そのため、オリジナルの jsclasses.dtx 内にあった hack (\everyparhook) は不要 になったので、削除しました。
- 「amsmath との衝突の回避」のコードは、上流で既に対処されているうえ、これがあると grfext.sty を読み込んだ際にエラーを引き起こすので削除しました。

[2014-02-07 LTJ] jsclasses 2014-02-07 ベースにしました. 以下では実際のコードに即して説明します。

2 LuaT_EX-ja の読み込み

まず、luatexja を読み込みます。

1 \RequirePackage{luatexja}

3 オプション

これらのクラスは \documentclass{ltjsarticle} あるいは \documentclass[オプション] {ltjsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ (論理変数) を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

2 \newif\if@restonecol

\ifOtitlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

3 \newif\if@titlepage

4 \langle book \\ newif \\ if @openright

\ifCopenright \chapter, \part を奇数ページ起こしにするかどうかです。 書籍では真が標準です。

\if@mainmatter 真なら本文、偽なら前付け・後付けです。 偽なら \chapter で章番号が出ません。

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチですが、 実際には用いられません。

6 \newif\if@enablejfam \@enablejfamtrue

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積 $1 \, \mathrm{m}^2$,縦横比 $1 : \sqrt{2}$ の長方形の辺の長さを mm 単位に切り捨てたものです。 これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたものが A1, A2, …です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。 JIS では B0 判の面積が $1.5\,\mathrm{m}^2$ ですが, ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。 したがって ISO の B0 判は $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$ です。 このため,IATEX 2_ε の b5paper は $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$ ですが, pIATEX 2_ε の b5paper は $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$ になっています。 ここでは pIATEX 2_ε にならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, $182\text{mm} \times 230\text{mm}$), a4var (A4 変形, $210\text{mm} \times 283\text{mm}$) を追加しました。

```
7 \DeclareOption{a3paper}{%
```

- 8 \setlength\paperheight {420mm}%
- 9 \setlength\paperwidth {297mm}}
- 10 \DeclareOption{a4paper}{%
- 11 \setlength\paperheight {297mm}%
- 12 \setlength\paperwidth {210mm}}
- 13 \DeclareOption{a5paper}{%
- 14 \setlength\paperheight {210mm}%
- 15 \setlength\paperwidth {148mm}}
- 16 \DeclareOption{a6paper}{%
- 17 \setlength\paperheight {148mm}%
- 18 \setlength\paperwidth {105mm}}
- 19 \DeclareOption{b4paper}{%
- 20 \setlength\paperheight {364mm}%
- 21 \setlength\paperwidth {257mm}}
- 22 \DeclareOption{b5paper}{%
- 23 \setlength\paperheight {257mm}%
- 24 \setlength\paperwidth {182mm}}
- 25 \DeclareOption{b6paper}{%
- 26 \setlength\paperheight {182mm}%
- 27 \setlength\paperwidth $\{128mm\}$ }
- $28 \label{lem:a4j}{\%}$
- 29 \setlength\paperheight {297mm}%
- 30 \setlength\paperwidth {210mm}}
- 32 \setlength\paperheight {210mm}%
- 33 \setlength\paperwidth {148mm}}
- 34 \DeclareOption{b4j}{%
- 35 \setlength\paperheight {364mm}%
- 36 \setlength\paperwidth {257mm}}
- 37 \DeclareOption{b5j}{%
- 38 \setlength\paperheight {257mm}%
- 39 \setlength\paperwidth {182mm}}
- 40 \DeclareOption{a4var}{%

```
41 \setlength\paperheight {283mm}%
42 \setlength\paperwidth {210mm}}
```

43 \DeclareOption{b5var}{%

44 \setlength\paperheight {230mm}%

45 \setlength\paperwidth {182mm}}

46 \DeclareOption{letterpaper}{%

47 \setlength\paperheight {11in}%

48 \setlength\paperwidth {8.5in}}

49 \DeclareOption{legalpaper}{%

50 \setlength\paperheight {14in}%

51 \setlength\paperwidth {8.5in}}

52 \DeclareOption{executivepaper}{%

53 \setlength\paperheight {10.5in}%

54 \setlength\paperwidth {7.25in}}

■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

 $55 \neq 55$

56 \@landscapefalse

57 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}

■slide オプション slide を新設しました。

58 \newif\if@slide

 $59 \ensuremath{\setminus} \texttt{Qslidefalse}$

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。 これは等比数列になるように選んだものです(従来の20pt も残しました)。 \@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、 標準的なドキュメントクラスと同様にポイント数から 10 を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。 [2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

- 60 \newcommand{\@ptsize}{0}
- 61 \DeclareOption{slide}{\@slidetrue\renewcommand{\@ptsize}{26}\@landscapetrue\@titlepagetrue}
- 62 \DeclareOption{8pt}{\renewcommand{\@ptsize}{-2}}
- 63 \DeclareOption{9pt}{\renewcommand{\@ptsize}{-1}}
- 64 \DeclareOption{10pt}{\renewcommand{\@ptsize}{0}}
- 65 \DeclareOption{11pt}{\renewcommand{\@ptsize}{1}}
- $66 \label{lem:command} $$ 66 \end{12pt} {\rm enewcommand} \end{2ptsize} $$ $$ $$$
- $67 \label{lem:command} $$ 67 \ensuremath{\ensuremath{\texttt{0ptsize}}}{4} $$$
- 68 \DeclareOption{17pt}{\renewcommand{\@ptsize}{7}} 69 \DeclareOption{20pt}{\renewcommand{\@ptsize}{10}}
- 70 \DeclareOption{21pt}{\renewcommand{\@ptsize}{11}}
- // \Declareuption\Zipt\\tenewcommand\\eptsize\\iii\}
- 71 \DeclareOption{25pt}{\renewcommand{\@ptsize}{15}}
 72 \DeclareOption{30pt}{\renewcommand{\@ptsize}{20}}
- 73 \DeclareOption{36pt}{\renewcommand{\@ptsize}{26}}
- 74 \DeclareOption{43pt}{\renewcommand{\@ptsize}{33}}
- 75 \DeclareOption{12Q}{\renewcommand{\@ptsize}{1200}}
- 76 \DeclareOption{14Q}{\renewcommand{\@ptsize}{1400}}

- 77 \DeclareOption{10ptj}{\renewcommand{\@ptsize}{1001}}
- 78 \DeclareOption{10.5ptj}{\renewcommand{\@ptsize}{1051}}
- 79 \DeclareOption{11ptj}{\renewcommand{\@ptsize}{1101}}
- 80 \DeclareOption{12ptj}{\renewcommand{\@ptsize}{1201}}
- ■トンボオプション トンボ (crop marks) を出力します。 実際の処理は lltjcore.sty で行います。 オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。 これらはアスキー版のままです。 カウンタ \hour, \minute は luatexja-compat.sty で宣言されています。
- 81 \hour\time \divide\hour by 60\relax
- 82 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
- 83 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
- 84 \DeclareOption{tombow}{%
- 85 \tombowtrue \tombowdatetrue
- 86 \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
- 87 \@bannertoken{%
- 88 \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
- 89 \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
- 90 \maketombowbox}
- 91 \DeclareOption{tombo}{%
- 92 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 93 \setlength{\Qtombowwidth}{.1\pQ}%
- 94 \maketombowbox}
- ■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。 面付けに便利です。これもアスキー版のままです。
- 95 \DeclareOption{mentuke}{%
- 96 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 97 \setlength{\Qtombowwidth}{\zQ}\%
- 98 \maketombowbox}
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 99 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
- 100 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
- $101 \verb|\DeclareOption{vartwoside}{\Qtwosidetrue \Qmparswitchfalse}|$
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 102 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
- 103 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
 - ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 104 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 105 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}

■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、openany で偶数ページからでも始まるようになります。

- 106 \book\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue}
- 107 $\langle book \rangle \DeclareOption\{openany\}\{\Qopenrightfalse\}$

■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。

eqnarray IAT_EX の eqnarray 環境では & でできるアキが大きすぎる ようですので、少し小さくします。 また、中央の要素も \d isplaystyle にします。

- 108 \def\eqnarray{%
- 109 \stepcounter{equation}%
- 110 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
- 111 \global\@eqnswtrue
- 112 \m@th
- 113 \global\@eqcnt\z@
- 114 \tabskip\@centering
- 115 \let\\\@eqncr
- 116 \$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
- 117 \hskip\@centering\$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}\$\@eqnsel
- 118 &\global\@eqcnt\@ne \hfil\$\displaystyle{{}##{}}\$\hfil
- 219 &\global\@eqcnt\tw@ \$\displaystyle{##}\$\hfil\tabskip\@centering
- 121 \tabskip\z@skip
- 122 \cr}

leqno で数式番号が左側になります。 fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに 出力されます。 森本さんにしたがって訂正しました。

- 123 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
- 124 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}%
- 125 % flegn 用の egnarray 環境の再定義
- 126 \def\eqnarray{%
- 127 \stepcounter{equation}%
- 128 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
- 129 \global\@eqnswtrue\m@th
- 130 \global\@eqcnt\z@
- 131 \tabskip\mathindent
- 132 \let\\=\@eqncr
- 133 \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
- 134 \ifvmode
- 135 \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
- 136 \fi
- 137 \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
- $\verb|\setlength| belowd is play shortskip{\above displayskip}| % above display shortskip{\above displayskip}| % above display shortskip{\above display shortskip}| % above display shortskip{\ab$
- 140 \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
- \$\$\everycr{}\halign to\linewidth% \$\$
- 142 \bgroup
- 143 \hskip\@centering\$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}\$\@eqnsel

■文献リスト 文献リストを open 形式 (著者名や書名の後に改行が入る) で出力します。 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。

```
150 % \DeclareOption{openbib}{%
151 % \AtEndOfPackage{%
152 % \renewcommand\@openbib@code{%
153 % \advance\leftmargin\bibindent
154 % \itemindent -\bibindent
155 % \listparindent \itemindent
156 % \parsep \z@}%
157 % \renewcommand\newblock{\par}}}
```

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション pTEX では数式中では 16 通りのフォントしか使えませんでしたが、LuaTEX では Omega 拡張が取り込まれていて 256 通りのフォントが使えます。 ただし、IATEX 2ε カーネルでは未だに数式ファミリの数は 16 個に制限されているので、 実際に使用可能な数式ファミリの数を増やすためには lualatex-math パッケージを 読み込む必要があることに注意が必要です。

```
158 \DeclareOption{disablejfam}{%
```

159 \ClassWarningNoLine{\@currname}{The class option 'disablejfam' is obsolete}}

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。

```
160 \newif\ifdraft
161 \DeclareOption{draft}{\drafttrue \setlength\overfullrule{5pt}}
162 \DeclareOption{final}{\draftfalse \setlength\overfullrule{0pt}}
```

■和文フォントメトリックの選択 ここでは OTF パッケージのメトリックを元とした, jfm-ujis.lua メトリックを標準で使います。 古い min10, goth10 互換のメトリックを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。 pTEX でよく利用される jis フォントメトリックと互換のメトリックを使いたい場合は、 ptexjis というオプションを指定します。 winjis メトリックは用済みのため、winjis オプションは無視されます。

```
163 \newif\ifmingoth
164 \mingothfalse
165 \newif\ifjisfont
166 \jisfontfalse
167 \newif\ifptexjis
168 \ptexjisfalse
169 \DeclareOption{winjis}{%
170 \ClassWarningNoLine{\@currname}{The class option 'winjis' is obsolete}}
171 \DeclareOption{uplatex}{%
172 \ClassWarningNoLine{\@currname}{The class option 'uplatex' is obsolete}}
```

```
173 \DeclareOption{mingoth}{\mingothtrue}
```

- 174 \DeclareOption{ptexjis}{\ptexjistrue}
- 175 \DeclareOption{jis}{\jisfonttrue}

■papersize スペシャルの利用 ltjsclasses では papersize オプションの有無に関わらず, PDF のページサイズは適切に設定されます。

- 176 \newif\ifpapersize
- 177 \papersizefalse
- 178 \DeclareOption{papersize}{\papersizetrue}

■英語化 オプション english を新設しました。

- $179 \neq if@english$
- 180 \@englishfalse

■Itjsreport 相当 オプション report を新設しました。

- $182 \langle *book \rangle$
- 183 \newif\if@report
- 184 \@reportfalse
- 185 \DeclareOption{report}{\@reporttrue\@openrightfalse\@twosidefalse\@mparswitchfalse}
- 186 (/book)

■オプションの実行 デフォルトのオプションを実行します。 multicols や url を \RequirePackage するのはやめました。

- 187 \article\\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
- $188 \langle book \rangle \$ ExecuteOptions{a4paper,twoside,onecolumn,titlepage,openright,final}
- $189 \langle jspf \rangle \setminus ExecuteOptions\{a4paper,twoside,twocolumn,notitlepage,fleqn,final\}$
- 190 (kiyou)\ExecuteOptions{a4paper,twoside,twocolumn,notitlepage,final}
- 191 \ProcessOptions

後処理

- 192 \if@slide
- 194 \fi
- 195 \if@landscape
- 196 \setlength\@tempdima {\paperheight}
- 197 \setlength\paperheight{\paperwidth}
- 198 \setlength\paperwidth {\@tempdima}
- 199 \fi

■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

- 200 $\langle article j book \rangle if@slide\def\n@baseline{13}\else\def\n@baseline{16}\fi$
- $201 \langle jspf \rangle \def \n@baseline{14.554375}$
- $202 \langle kiyou \rangle \def \n@baseline{14.897}$

■拡大率の設定 サイズの変更は TEX のプリミティブ \mag を使って行います。 9 ポイントについては行送りも若干縮めました。 サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。 true in を使っていたところを \inv@mag in に直しましたので, geometry パッケージと共存できると思います。 なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

```
203 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{unv@mag}{1}}
```

- 204 \ifnum\@ptsize=-2
- 205 \mag 833
- 206 \def\inv@mag{1.20048}
- 207 \def\n@baseline{15}%
- 208 \fi
- 209×0
- 210 \mag 913 % formerly 900
- 211 \def\inv@mag{1.09529}
- 212 \def\n@baseline{15}%
- 213 \fi
- 214×0
- 215 \mag 1095 % formerly 1100
- $216 \quad \texttt{\def} \texttt{\university} \\ 0.913242$
- 217 \fi
- 218 \ifnum\@ptsize=2
- 219 \mag 1200
- 220 \def\inv@mag{0.833333}
- 221 \fi
- 222 \ifnum\@ptsize=4
- 223 \mag 1440
- 224 \def\inv@mag{0.694444}
- 225 \fi
- 226 \ifnum\@ptsize=7
- 227 \mag 1728
- 228 \def\inv@mag{0.578704}
- 229 **\fi**
- $230 \ifnum\@ptsize=10$
- 231 \mag 2000
- 232 \def\inv@mag{0.5}
- 233 \fi
- 234 \ifnum\@ptsize=11
- 235 \mag 2074
- 236 \def\inv@mag{0.48216}
- 237 \fi
- 238 \ifnum\@ptsize=15
- 239 \mag 2488
- 240 \def\inv@mag{0.401929}

```
241 \fi
242 \ifnum\@ptsize=20
243 \mag 2986
244 \def\inv@mag{0.334896}
245 \fi
246 \ifnum\@ptsize=26
    \mag 3583
247
    \def\inv@mag{0.279096}
249 \fi
250 \ifnum\@ptsize=33
     \mag 4300
251
    \def\inv@mag{0.232558}
252
253 \fi
254 \times 0
255
    \mag 923
   \def\inv@mag{1.0834236}
257 \fi
258 \times 0
    \mag 1077
259
260 \def\inv@mag{0.928505}
261 \fi
262 \times 000
     \mag 1085
     \label{lem:def_inv@mag} $$ \left(0.921659\right) $$
264
265 \fi
266 \times 0000
     \mag 1139
267
268 \def\inv@mag{0.877963}
269 \fi
270 \injty 0ptsize=1101
    \mag 1194
271
272 \ \def\inv@mag{0.837521}
273 \fi
274 \times 0
275 \mag 1302
276 \def\inv@mag{0.768049}
277 \fi
278 (*kiyou)
279 \mag 977
280 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1.02354$}}}
281 (/kiyou)
282 \setlength\paperwidth{\inv@mag\paperwidth}%
283 \setlength\paperheight{\inv@mag\paperheight}%
```

■PDF の用紙サイズの設定

\pdfpagewidth 出力の PDF の用紙サイズをここで設定しておきます。 tombow が真のときは 2 インチ足し \pdfpageheight ておきます。

```
284 \setlength{\@tempdima}{\paperwidth}
285 \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
286 \iftombow
287 \advance \@tempdima 2in
288 \advance \@tempdimb 2in
289 \fi
290 \setlength{\pdfpagewidth}{\@tempdima}
291 \setlength{\pdfpageheight}{\@tempdimb}
```

4 和文フォントの変更

JIS の 1 ポイントは 0.3514mm(約 1/72.28 インチ), PostScript の 1 ポイントは 1/72 インチですが, $T_{\rm EX}$ では 1/72.27 インチを 1pt(ポイント), 1/72 インチを 1bp(ビッグ ポイント)と表します。 QuarkXPress などの DTP ソフトは標準で 1/72 インチを 1 ポイント としますが,以下ではすべて 1/72.27 インチを 1pt としています。 1 インチは定義により 25.4mm です。

 pT_{EX} (アスキーが日本語化した T_{EX})では、例えば従来のフォントメトリック min10 や JIS フォントメトリックでは「公称 10 ポイントの和文フォントは、 実際には 9.62216pt で出力される(メトリック側で 0.962216 倍される)」という 仕様になっています。 一方、Lua T_{EX} -ja の提供するメトリックでは、そのようなことはありません。 公称 10 ポイントの和文フォントは、10 ポイントで出力されます。

この ltjsclasses でも, 派生元の jsclasses と同じように, この公称 10 ポイントのフォントをここでは 13 級に縮小して 使うことにします。そのためには, $13\,\mathrm{Q}/10\,\mathrm{pt}\simeq0.924872$ 倍 すればいいことになります。

\ltigestdmcfont, \ltigestdgtfont による、デフォルトで使われ明朝・ゴシックのフォントの 設定に対応しました。この 2 つの命令の値はユーザが日々の利用でその都度指定するものではなく、 何らかの理由で非埋め込みフォントが正しく利用できない場合にのみ luatexja.cfg によって セットされるものです。

```
292 (*! jspf)
293 \expandafter\let\csname JY3/mc/m/n/10\endcsname\relax
 295
 296
297 \ensuremath{\setminus} else
 \ifptexjis
298
  299
  300
301
302
  303
304
305 \fi
306 \langle /! jspf \rangle
```

これにより、公称 10 ポイントの和文フォントを 0.924872 倍したことにより、 約 9.25 ポイント, DTP で使う単位(1/72 インチ)では 9.21 ポイントということになり、 公称 10 ポイントといっても実は 9 ポイント強になります。

某学会誌では、和文フォントを PostScript の 9 ポイントにするために、 $0.9*72.27/72 \simeq 0.903375$ 倍します。

```
307 (*jspf)
308 \exp \text{andafter} 
309 \ifmingoth
 311
312 \ensuremath{\setminus} else
313
 \ifptexjis
 314
 315
316
 \else
 317
 318
 \fi
319
320 \fi
321 (/jspf)
```

和文でイタリック体、斜体、サンセリフ体、 タイプライタ体の代わりにゴシック体を使うことにします。

[2014-03-25 LTJ] タイプライタ体に合わせるファミリを \jttdefault とし、 通常のゴシック体と別にできるようにしました. \jttdefault は、標準で \gtdefault と定義しています.

[2003-03-16] イタリック体、斜体について、和文でゴシックを当てていましたが、数学の定理環境などで多量のイタリック体を使うことがあり、ゴシックに すると黒々となってしまうという弊害がありました。 amsthm を使わない場合は定理の本文が明朝になるように\newtheorem 環境を手直ししてしのいでいましたが、TEX が数学で多用されることを考えると、イタリック体に明朝体を当てたほうがいいように思えてきましたので、イタリック体・斜体に対応する和文を明朝体に変えることにしました。

[2004-11-03] \rmfamily も和文対応にしました。

```
322 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
323 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
324 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}
325 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{}
326 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}
327 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
328 \DeclareFontShape{JY3}{gt}{m}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}
329 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
330 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{bx}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}
331 % \DeclareFontShape{JT3}{mc}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
332 % \DeclareFontShape{JT3}{gt}{bx}{n}{<->ssub*gt/m/n}{}
333 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}
```

```
334 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{s1}{<->ssub*mc/m/n}{}
335 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{sc}{<->ssub*mc/m/n}{}
336 %% \DeclareFontShape{JT3}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
337 %% \DeclareFontShape{JT3}{gt}{m}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{}
338 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
339 %% \DeclareFontShape{JT3}{mc}{bx}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{}
340 \renewcommand\jttdefault{\gtdefault}
341 \DeclareRobustCommand\rmfamily
          342
           \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
343
344 \DeclareRobustCommand\sffamily
          {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
345
           \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
346
347 \DeclareRobustCommand\ttfamily
          {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
348
           \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\jttdefault\selectfont}
349
```

 ${
m LuaT_EX}$ -ja では和文組版に伴うグルーはノードベースで挿入するようになり、また 欧文・和文間のグルーとイタリック補正は干渉しないようになりました。 まだ「和文の斜体」については ${
m LuaIAT_EX}$ カーネル側でまともな対応がされていませんが、 ${
m jsclasses.dtx}$ で行われていた ${
m text_mc}$, ${
m text_mc}$ の再定義は不要のように思われます。

jsclasses.dtx 中で行われていた \reDeclareMathAlphabet の再定義は削除。

```
350 \AtBeginDocument{%
```

- 351 \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathmc}
- $352 \ \ensuremath{\halphabet{\mathbb{}}{\mathbb{}}}{\mathbb{}}}$

\textsterling

これは \pounds 命令で実際に呼び出される文字です。 従来からの OT1 エンコーディングでは \\$ のイタリック体が \pounds なので cmti が使われていましたが、 1994 年春からは cmu (upright italic, 直立イタリック体) に変わりました。 しかし cmu はその性格からして実験的なものであり、 \pounds 以外で使われるとは思えないので、 ここでは cmti に戻してしまいます。

[2003-08-20] Computer Modern フォントを使う機会も減り, T1 エンコーディング が一般的になってきました。この定義はもうあまり意味がないので消します。

353 % \DeclareTextCommand{\textsterling}{OT1}{{\itshape\char`\\$}}

アスキーの kinsoku.dtx では「'」「"」「"」前後のペナルティが 5000 に なっていたので,jsclasses.dtx ではそれを 10000 に補正していました。 しかし,LuaT_EX-ja では最初からこれらのパラメータは 10000 なので, もはや補正する必要はありません。

「TFX!」「〒515」の記号と数字の間に四分アキが入らないようにします。

```
354 \times expansion (1) 354 \times expansion (2) 354 \times expansio
```

355 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\opin,1}}

「C や C++ では……」と書くと、C++ の直後に四分アキが入らないのでバランスが悪くなります。 四分アキが入るようにしました。% の両側も同じです。

```
356 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
```

357 $\left(\frac{3}{3}\right)$

jsclasses.dtx では 80~ff の文字の \xspcode を全て 3 にしていましたが、LuaTFX-ja では同様の内容が最初から設定されていますので、対応する部分は削除。

\@ 欧文といえば、IATFX の \def\@{\spacefactor\@m} という定義(\@m は 1000) では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。 そこで,次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

358 \def\@{\spacefactor3000\space}

5 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など) の実際の挙動の設定は, 三 つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、 たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い、行送りは 16 ポイントである

という意味です。 ただし、処理を速くするため、 以下では 10 と同義の IATFX の内部命令 \@xpt を使っています。 この \@xpt の類は次のものがあり, IATFX 本体で定義されてい ます。

\@vpt	5	\@vipt	6	\@viipt	7
\@viiipt	8	\@ixpt	9	\@xpt	10
\@xipt	10.95	\@xiipt	12	\@xivpt	14.4

\@setfontsize ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して, 段落の字下げ \parindent, 和文文字 間のスペース kanjiskip, 和文・欧文間のスペース xkanjiskip を変更しています。

> kanjiskip は ltj-latex.sty で Opt plus 0.4pt minus 0.4pt に 設定しています が、これはそもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。 それに、プラスになっ たりマイナスになったりするのは、 追い出しと追い込みの混在が生じ、統一性を欠きます。 なるべく追い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが、 ごくわずかなマイナ スは許すことにしました。

> xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、 追い出すために三分ある いは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分 であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても 空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 $(1\zw)$ に直します。

[2008-02-18] english לשלים ליסוי \parindent & 1em にしました。

[2014-05-14 LTJ] \ltjsetparameter の実行は時間がかかるので、 \ltjsetkanjiskip と \ltjsetxkanjiskip (両者とも、実行前には \ltj@setpar@global の実行が必要) に しました.

359 \def\@setfontsize#1#2#3{%

```
360 % \@nomath#1%
361
     \ifx\protect\@typeset@protect
362
       \let\@currsize#1%
     \fi
363
     \fontsize{#2}{#3}\selectfont
364
     \ifdim\parindent>\z@
365
       \if@english
366
367
          \parindent=1em
       \else
368
          \parindent=1\zw
369
370
       \fi
     \fi
371
     \ltj@setpar@global
372
     \label{linear_continuous_continuous} $$ \prod_{x \in \mathbb{Z}} 0pt \ plus \ .1\zw \ minus \ .01\zw $$
373
374
     \if@slide
       \ltjsetxkanjiskip{0.1em}
375
     \else
376
       \ltjsetxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
377
378
 これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、 \emergencystretch に訴え
ます。
379 \emergencystretch 3\zw
```

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines \widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化 されてしまうという shintok さんのご指摘に対し て、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

```
380 \newif\ifnarrowbaselines
381 \if@english
382
     \narrowbaselinestrue
383 \fi
384 \def\narrowbaselines{%
     \narrowbaselinestrue
     \skip0=\abovedisplayskip
386
     \skip2=\abovedisplayshortskip
387
     \skip4=\belowdisplayskip
388
     \skip6=\belowdisplayshortskip
389
     \@currsize\selectfont
     \abovedisplayskip=\skip0
391
392
     \abovedisplayshortskip=\skip2
     \belowdisplayskip=\skip4
393
```

\belowdisplayshortskip=\skip6\relax}

394

395 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、 欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、 アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、 ここでは 16 ポイントにしました。 ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント (アスキーのものの 0.961 倍)であることもあり、 行送りがかなりゆったりとしたと思います。 実際、 $16/9.25\approx 1.73$ であり、和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75) に近づきました。

- 396 \renewcommand{\normalsize}{%
- 397 \ifnarrowbaselines
- 398 \@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt
- 399 \else
- 400 \@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%
- 401 \fi

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip),数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T_EX Q & A 52569 から始まる議論について逡巡して いましたが、結局、微調節してみることにしました。

- 402 \abovedisplayskip 11\p0 \@plus3\p0 \@minus4\p0
- 403 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
- 404 \belowdisplayskip 9\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
- 405 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に、リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を、 \@listi にコピーしておきます。 \@listI の設定は後で出てきます。

 $406 \left(\text{let}\Clisti\ClistI \right)$

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

407 \normalsize

\Cht 基準となる長さの設定をします。 lltjfont.sty で宣言されている パラメータに実際の値

\Cdp を設定します。 たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅 (1\zw) です。

\Cwd 408 \setbox0\hbox{\char"3000}% 全角スペース

409 \setlength\Cht{\ht0}

\Cvs 410 \setlength\Cdp{\dp0}

\Chs 411 \setlength\Cwd{\wd0}

- $412 \ensuremath \cvs{\baselineskip}$
- $413 \setlength\Chs{\wd0}$

\small \small も \normalsize と同様に設定します。 行送りは, \normalsize が 16 ポイントな

- ら、割合からすれば $16 \times 0.9 = 14.4$ ポイントになりますが、 \small の使われ方を考え
- て, ここでは和文 13 ポイント, 欧文 11 ポイントとします。 また, \topsep と \parsep
- は、元はそれぞれ 4 ± 2 、 2 ± 1 ポイントでしたが、ここではゼロ(z0) にしました。
- $414 \mbox{ newcommand{\small}{%}}$

```
\ifnarrowbaselines
             415
             416 (! kiyou)
                         \@setfontsize\small\@ixpt{11}%
             417 (kiyou)
                        \ensuremath{\texttt{@setfontsize}}\
             418
                 \else
             419 (! kiyou)
                         \@setfontsize\small\@ixpt{13}%
             420 (kiyou)
                        \@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
             421
                 \fi
             422
                 \abovedisplayskip 9\p@ \@plus3\p@ \@minus4\p@
                 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@
             423
                 \belowdisplayskip \abovedisplayskip
             424
                 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
             425
                 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
             426
                            \topsep \z@
             427
                            \parsep \z@
             428
             429
                            \itemsep \parsep}}
\footnotesize
            \footnotesize も同様です。 \topsep と \parsep は、元はそれぞれ 3\pm 1、 2\pm 1 ポイン
             トでしたが、ここではゼロ(\ze)にしました。
             430 \newcommand{\footnotesize}{%
                 \ifnarrowbaselines
             432 (! kiyou)
                         \@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
             433 (kiyou)
                        \@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
                 \else
             435 (! kiyou)
                         \@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
             436 (kiyou)
                        \@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
             437
                 \abovedisplayskip 6\p@ \@plus2\p@ \@minus3\p@
             438
                 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@
             439
                 \belowdisplayskip \abovedisplayskip
                 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
             441
                 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
             442
                            \topsep \z@
             443
             444
                            \parsep \z@
                            \itemsep \parsep}}
             445
            それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
 \scriptsize
             ます。 特に注意すべきは \large で、 これは二段組のときに節見出しのフォントとして使
      \tiny
             い、 行送りを \normalsize と同じにすることによって、 節見出しが複数行にわたっても
      \large
            段間で行が揃うようにします。
      \Large
              [2004-11-03] \HUGE を追加。
      \LARGE
             446 \newcommand{\scriptsize}{\@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
       \huge
             447 \newcommand{\tiny}{\@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
       \Huge
             448 \if@twocolumn
            \HUGE
             451 \else
             452 (! kiyou) \newcommand{\large}{\@setfontsize\large\@xiipt{17}}
```

- 454 \fi
- $455 \langle ! kiyou \rangle \newcommand{\Large}{\Qsetfontsize\Large\Qxivpt{21}}$
- 457 \newcommand{\LARGE}{\@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
- $458 \mbox{ \newcommand{\huge}{\contsize\huge\@xxpt{28}}}$
- $459 \end{\two} {\tt \command{\two}} {\tt \command{\tw$
- $460 \mbox{ }\mbox{\command{\huge}{\command{\huge}}}$

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。 和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、 連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。 本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、 行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがいいでしょう。

 $461 \text{\ensemblay=\en$

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。 とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、 もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく、\headfont という命令で定めることにします。 これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが、通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 『pIATEX 2ε 美文書作成入門』(1997年)では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが、\fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

- 462 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
- $463 \mbox{ \newcommand{\headfont}{\gtfamily\sffamily}}$
- $464 \% \mbox{ \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}}$

6 レイアウト

■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。 元は 10pt でしたが、2\zw にしまし

\columnseprule

た。 このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

- $465 \langle ! kiyou \rangle \setlength \columnsep{2\zw}$
- 466 (kiyou)\setlength\columnsep{28truebp}
- 467 \setlength\columnseprule{0\p0}

■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら、 \lineskip より近づかないように

\normallineskip します。 元は Opt でしたが 1pt に変更しました。 normal... の付いた方は保存用です。 \lineskiplimit 468 \setlength\lineskip{1\p0}

\normallineskiplimit

```
469 \setlength\normallineskip{1\p0}
```

- 470 \setlength\lineskiplimit{1\p0}
- 471 \setlength\normallineskiplimit{1\p0}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。 行送りの伸縮はしないのが一般的です。

472 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。 元は 0pt plus 1pt になっていましたが、ここで

\parindent はゼロにしました。 \parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

473 \setlength\parskip{0\p0}

474 \if@slide

475 \setlength\parindent{0\zw}

 $476 \ensuremath{\setminus} else$

477 \setlength\parindent{1\zw}

478\fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値 のうちどれかを選ぶよう

\@medpenalty になっています。 ここはオリジナル通りです。

\@highpenalty

 $479 \ensuremath{\,^{\circ}}\ensur$

 $480 \mbox{\em 0medpenalty} 151$

481 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

 $482\;\mbox{\ensuremath{\%}}$ \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。 デフォルトは 100 です。

483 % \brokenpenalty 100

6.1 ページレイアウト

■縦方向のスペース

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。 あまりぎりぎりの値

\topskip にすると、本文中に \int のような高い文字が 入ったときに 1 行目のベースラインが他のページより下がってしまいます。 ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

[2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は 12pt でしたが、新ドキュメントクラスでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようです ので、2 倍に増やしました。代わりに、版面の上下揃えの 計算では \headheight ではなく \topskip を使う ことにしました。

```
484 \setlength\topskip{10\p0}
           485 \if@slide
           486 \setlength\headheight{0\p0}
           487 \else
               \setlength\headheight{2\topskip}
           489 \fi
          \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。 標準クラスファイルでは、book で
\footskip
          0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが、ここではA4
          判のときちょうど 1cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍(最小 \baselineskip)
          としました。 書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。
           490 (*article j kiyou)
           491 \if@slide
               \setlength\footskip{0pt}
           492
           493 \ensuremath{\setminus} else
               \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
           494
               \ifdim\footskip<\baselineskip
           495
                 \setlength\footskip{\baselineskip}
              \fi
           497
           498 \fi
           499 (/article j kiyou)
          500 (jspf)\setlength\footskip{9mm}
           501 (*book)
           502 \if@report
               \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
          503
                \ifdim\footskip<\baselineskip
                 \setlength\footskip{\baselineskip}
           505
           506
               \fi
           507 \ensuremath{\setminus} else
           508 \setlength\footskip{0pt}
           509 \fi
          510 (/book)
          \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), そ
 \headsep
          れ以外で25pt(約8.79mm)になっていました。ここではarticleは \footskip - \topskip
           としました。
          511 (*article)
          512 \if@slide
          513 \setlength\headsep{0\p0}
          514 \ensuremath{\setminus} else
               \setlength\headsep{\footskip}
           516 \addtolength\headsep{-\topskip}
           517 \fi
          518 (/article)
          519 (*book)
          520 \if@report
          521 \setlength\headsep{\footskip}
          522 \addtolength\headsep{-\topskip}
```

- 523 \else
 524 \setlength\headsep{6mm}
 525 \fi
 526 $\langle \text{book} \rangle$
 527 $\langle *\text{jspf} \rangle$
 528 \setlength\headsep{9mm}
 529 \addtolength\headsep{-\topskip}
 530 $\langle \text{jspf} \rangle$
 531 $\langle *\text{kiyou} \rangle$
- $532 \setlength\headheight{0\p0}$
- $533 \verb|\setlength\headsep{0\p0}|$
- 534 (/kiyou)
- \maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain TEX や IATEX 2.09 では 4pt に固定でした。 IATEX2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズ の 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ (ここでは 10pt) に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt) にします。
 - 535 \setlength\maxdepth{.5\topskip}

■本文の幅と高さ

- \fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。 そこで、書籍の場合に限って、 紙 の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、 ヘッダやフッタは本 文領域より広く取ることにします。 このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。
 - 536 \newdimen\fullwidth
 - この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない 全角幅の整数 倍(二段組では全角幅の偶数倍)にします。 0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から約 2 インチを引いた値になるように選びました。 book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。
- \textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。 article では A4 縦置きで 49 文字となります。 某学会誌スタイルでは 50\zw(25 文字× 2 段)+段間 8mm とします。
 - $537 \langle *article \rangle$
 - 538 \if@slide
 - 539 \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}
 - $540 \ensuremath{\setminus} \mathtt{else}$
 - $541 \quad \texttt{\setlength\fullwidth\{0.76\paperwidth\}}$
 - 542 **\fi**
 - $543 \ensuremath{\mbox{\sc 0tempdima=1\xw}}\$ \fi
 - $544 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima$
 - $545 \sl \{\fullwidth\}$
 - 546 (/article)
 - $547~\langle*\mathsf{book}\rangle$
 - 548 \if@report

```
549
     \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
550 \else
     \setlength\fullwidth{\paperwidth}
     \addtolength\fullwidth{-36mm}
552
553 \fi
554 \if Otwo column \Otempdima = 2\zw \else \Otempdima = 1\zw \fi
555 \divide\fullwidth\end{multiply}fullwidth\end{multiply}fullwidth
556 \setlength\textwidth{\fullwidth}
557 \if@report \else
558
     \if@twocolumn \else
       \ifdim \fullwidth>40\zw
          \setlength\textwidth{40\zw}
560
561
    \fi
562
563 \fi
564 (/book)
565 (*jspf)
566 \setlength\fullwidth{50\zw}
567 \addtolength\fullwidth{8mm}
568 \setlength\textwidth{\fullwidth}
569 (/jspf)
570 \langle *kiyou \rangle
571 \setlength\fullwidth{48\zw}
572 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
573 \setlength\textwidth{\fullwidth}
574 (/kiyou)
```

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。 念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。 0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから 上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。 以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

```
575 (*article j book)
576 \if@slide
577 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}
578 \else
579 \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}
580 \fi
581 \addtolength{\textheight}{-\topskip}
582 \addtolength{\textheight}{-\headsep}
583 \addtolength{\textheight}{-\footskip}
584 \addtolength{\textheight}{-\topskip}
```

- 585 \divide\textheight\baselineskip
- 586 \multiply\textheight\baselineskip
- 587 (/article j book)
- 588 (jspf)\setlength{\textheight}{51\baselineskip}
- $589 \langle kiyou \rangle \setminus \{47 \}$
- 590 \addtolength{\textheight}{\topskip}
- 591 \addtolength{\textheight}{0.1\p0}
- $592 \langle jspf \rangle \setminus \{10mm\}$

\marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。 \marginparpush は欄外の書き込

\marginparpush

みどうしの最小の間隔です。

- $593 \verb|\columnsep|{$columnsep}|$
- $594 \ensuremath{\texttt{Setlength}}\$

\oddsidemargin それぞれ奇数ページ,偶数ページの左マージンから1インチ引いた値です。 片面印刷では

\evensidemargin

\oddsidemargin が使われます。 T_{EX} は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トンボ関係のオプションが指定されると lltjcore.sty はトンボの内側に 1in のスペース (1truein ではなく) を挿入するので,場合分けしています。

[2011-10-03 LTJ] LuaTeX (pdfTeX?) では 1truein ではなく 1in になるようです。

- 595 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}
- $596 \dotsense {\dotsense } {-\dotsense } {$
- 597 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}
- 598 \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}
- 599 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
- 601 \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}
- $602 \verb| \addtolength{\ensidemargin}{-\textwidth}|$
- 603\fi

\marginparwidth

\marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。 外側マージンの幅(\evensidemargin +1 インチ)から 1 センチを引き、 さらに \marginparsep(欄外の書き込みと本文のアキ)を引いた値に しました。最後に 1 \zw の整数倍に切り捨てます。

- 604 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}
- 605 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
- 606 \addtolength\marginparwidth{-1in}
- 607 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}
- $608 \addtolength\marginparwidth{-1cm}$
- $609 \verb| addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}|$
- $610 \ensuremath{ \mbox{\tt @tempdima=1\zw}}$
- 611 \divide\marginparwidth\@tempdima
- 612 \multiply\marginparwidth\@tempdima

\topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離) から1インチ引いた値です。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。 以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2011-10-03 LTJ] ここも \oddsidemargin のときと同様に -\inv@mag in ではなく -1in にします。

- 613 \setlength\topmargin{\paperheight}
- $614 \addtolength topmargin{-\textheight}$
- 615 \if@slide
- 616 \addtolength\topmargin{-\headheight}
- 617 \else
- 618 \addtolength\topmargin{-\topskip}
- 619 \fi
- $620 \addtolength topmargin{-\headsep}$
- 621 \addtolength\topmargin{-\footskip}
- 622 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
- 623 (kiyou)\setlength\topmargin{81truebp}
- 624 \addtolength\topmargin{-1in}

■脚注

\footnotesep 各脚注の頭に入る支柱(strut)の高さです。 脚注間に余分のアキが入らないように, \footnotesize の支柱の高さ(行送りの0.7倍)に等しくします。

- 625 {\footnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}
- $626 \stlength\footnotesep{0.7\footnotesep}$

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。 標準の 10 ポイントクラスでは 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、 和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

 $627 \ensuremath{\skip\footins}{16\p0 \odden} \odden$ \cong \cong

■フロート関連 フロート (図,表) 関連のパラメータは IATEX 2_{ε} 本体で定義されていますが、ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ) ちなみに、カウンタは内部では \co を名前に冠したマクロになっています。 とフロートだけのページで設定が異なります。

\c@topnumber topnumber カウンタは本文ページ上部のフロートの最大数です。

628 \setcounter{topnumber}{9}

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。 フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

629 \renewcommand{\topfraction}{.85}

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

630 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

631 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

632 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。 フロートが入りやすいように元 の 0.2 を 0.1 に変えました。

633 \renewcommand{\textfraction}{.1}

\floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。 これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。

634 \renewcommand{\floatpagefraction}{.8}

\c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる 段抜きフロートの最大数です。

[2003-08-23] ちょっと増やしました。

635 \setcounter{dbltopnumber}{9}

\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる 段抜きフロートが占めうる最大の割合です。 0.7

を 0.8 に変えてあります。

636 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}

\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき 段抜きフロートの最小割合です。 0.5 を 0.8

に変えてあります。

637 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}

\floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。 \textfloatsep はページ上部・

\textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。 \intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本

\intextsep 文との距離です。

638 \setlength\floatsep $\{12\p0\ \p0\ \p0\ \p0\ \p0\}$

639 \setlength\textfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}

640 \setlength\intextsep {12\p@ \@plus 2\p@ \@minus 2\p@}

\dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。

 $\label{lem:continuous} $$ \dbltextfloatsep $$ 641 \end{continuous} $$ 641 \e$

642 \setlength\dbltextfloatsep{20\p@ \@plus 2\p@ \@minus 4\p@}

\Offtop フロートだけのページに入るグルーです。 \Offtop はページ上部, \Offbot はページ下

\Ofpsep 部、 \Ofpsep はフロート間に入ります。

 $\label{eq:condition} $$ \P^{643} \left(\frac{643}{643} \right) $$$

644 \setlength\@fpsep{8\p0 \@plus 2fil}

645 \setlength\@fpbot{0\p@ \@plus 1fil}

\@dblfptop 段抜きフロートについての値です。

 $\verb|\dblfpsep| 646 \end{|c|} 6$

\@dblfpbot 647 \setlength\@dblfpsep{8\p@ \@plus 2fil}

648 \setlength\@dblfpbot{0\p@ \@plus 1fil}

7 ページスタイル

ページスタイルとして、 $IAT_{EX}\,2_{\varepsilon}$ (欧文版) の標準クラス では empty, plain, headings, myheadings があります。 このうち empty, plain スタイルは $IAT_{EX}\,2_{\varepsilon}$ 本体 で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加されていますが、ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps@... の形のマクロで定義されています。

\Cevenhead \Coddhead, \Coddfoot, \Cevenhead, \Cevenfoot は 偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

\@oddhead フッタ)を出力する命令です。 これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。 \@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

\@oddfoot 柱の内容は、\chapter が呼び出す \chaptermark{何々}、 \section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。 柱を扱う命令には次のものがあります。

\markboth{**左**}{**右**} 両方の柱を設定します。

\markright{右}右の柱を設定します。\leftmark左の柱を出力します。\rightmark右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。 しかし、同一ページに複数の \markboth があると、 おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は、 \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。 IATEX 本体で定義されているものをコメントアウトした形で 載せておきます。

 $649 \ \% \ \ensuremath{\mbox{\sc M}}\$

650 % \let\@mkboth\@gobbletwo

651 % \let\@oddhead\@empty

652 % \let\@oddfoot\@empty

653 % \let\@evenhead\@empty

654 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

655 \def\ps@plainfoot{%

656 \let\@mkboth\@gobbletwo

657 \let\@oddhead\@empty

658 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%

```
659
                   \let\@evenhead\@empty
              660
                   \let\@evenfoot\@oddfoot}
              661 \ensuremath{\mbox{def\ps@plainhead}}\%
                   \let\@mkboth\@gobbletwo
              662
                   \let\@oddfoot\@empty
              663
                   \let\@evenfoot\@empty
              664
                   \def\@evenhead{%
              665
              666
                      \if@mparswitch \hss \fi
                      \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
              667
                      \if@mparswitch\else \hss \fi}%
              668
              669
                   \def\@oddhead{%
                      \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
              670
              671 \book\if@report \left\t \ps@plain\ps@plainfoot \else \let\ps@plain\t \fi
              672 (!book)\let\ps@plain\ps@plainfoot
\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。 ここではヘッダにアン
              ダーラインを引くようにしてみました。
                まず article の場合です。
              673 (*article j kiyou)
              674 \if@twoside
                   \def\ps@headings{%
              675
              676
                      \let\@oddfoot\@empty
                      \let\@evenfoot\@empty
              677
                      \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
                        \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
              679
              680
                        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                      \def\@oddhead{%
              681
                        \underline{%
              682
                          \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
              683
                      \let\@mkboth\markboth
              684
                      \def\sectionmark##1{\markboth{%
              685
                         \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\zw\fi
              686
              687
                         ##1}{}}%
                      \def\subsectionmark##1{\markright{%
              688
              689
                         \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection \hskip1\zw\fi
                         ##1}}%
              690
                   }
              691
              692 \else % if not twoside
                   \def\ps@headings{%
              693
                      \let\@oddfoot\@empty
              694
                      \def\@oddhead{%
              695
                        \underline{%
              696
                          \hbox to \left(\frac{{\left( \frac{\pi k}{\hbar i}\right)}}{\hbar i}\right)
              697
              698
                      \let\@mkboth\markboth
              699
                      \def\sectionmark##1{\markright{%
                          \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\zw\fi
              700
                          ##1}}}
              702\fi
```

```
703 (/article j kiyou)
                 次は book の場合です。 [2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませ
               ていただきました (北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。
               704 \langle *book \rangle
               705 \newif\if@omit@number
               706 \def\ps@headings{%
                    \let\@oddfoot\@empty
                    \let\@evenfoot\@empty
               708
                    \def\@evenhead{%
               709
                      \if@mparswitch \hss \fi
               710
                      \underline{\hbox to \fullwidth{\ltjsetparameter{autoxspacing={true}}}
               712
                          \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
               713
                      \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                    \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\ltjsetparameter{autoxspacing={true}}}
               714
                          715
                    \let\@mkboth\markboth
               716
                    \def\chaptermark##1{\markboth{%
               717
                      \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
               718
                        \if@mainmatter
               719
                          \if@omit@number\else
               720
               721
                           \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\zw
               722
                          \fi
               723
                       \fi
                      \fi
               724
               725
                      ##1}{}}%
                    \def\sectionmark##1{\markright{%
               726
                      \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\zw\fi
               727
                      ##1}}}%
               728
               729 \langle /book \rangle
                最後は学会誌の場合です。
               730 ⟨*jspf⟩
               731 \def\ps@headings{%
                   \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
               732
                   \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
               733
                    \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
                   \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
               735
               736 \langle /jspf \rangle
              myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で 柱を設定するた
\ps@myheadings
               め、ここでの定義は非常に簡単です。
                 [2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。
               737 \def\ps@myheadings{%
               738
                    \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
                    \def\@evenhead{%
               739
                      \if@mparswitch \hss \fi%
               740
                      \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
               741
                      \if@mparswitch\else \hss \fi}%
               742
```

```
743 \def\@oddhead{%
744 \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
745 \let\@mkboth\@gobbletwo
746 \dook\ \let\chaptermark\@gobble
747 \let\sectionmark\@gobble
748 \! book\ \let\subsectionmark\@gobble
749 }
```

8 文書のマークアップ

8.1 表題

\title これらは IATEX 本体で次のように定義されています。 ここではコメントアウトした形で示

\etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル、英語の著者名、キーワード、メールアドレスです。

```
\label{eq:continuous} $$ \end{array} $$ \end{array} $$ $$ \operatorname{command}_{\operatorname{li}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{def}}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{deauthor}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii}}_{\operatorname{ii
```

\plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty に しても表題のあるページだけ plain になってしまうことが ありました。これは \maketitle の定義中 に \thispagestyle{plain} が入っている ためです。この問題を解決するために、「全 体のページスタイルが empty でないなら このページのスタイルを plain にする」という次の 命令を作ることにします。

```
761 \def\plainifnotempty{%
762 \ifx \@oddhead \@empty
763 \ifx \@oddfoot \@empty
764 \else
765 \thispagestyle{plainfoot}%
766 \fi
767 \else
768 \thispagestyle{plainhead}%
769 \fi}
```

\maketitle 表題を出力します。 著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large, 和 文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。

```
770 (*article j book j kiyou)
771 \if@titlepage
772
     \verb|\newcommand{\maketitle}{%}|
773
       \begin{titlepage}%
          \let\footnotesize\small
774
          \let\footnoterule\relax
775
          \let\footnote\thanks
776
777
          \null\vfil
          \if@slide
778
            {\footnotesize \@date}%
779
            \begin{center}
780
              \mbox{} \\[1\zw]
781
              \large
782
              {\maybeblue\hrule heightOpt depth2pt\relax}\par
783
              \smallskip
784
              \@title
785
              \smallskip
786
              {\maybeblue\hrule height0pt depth2pt\relax}\par
787
788
              \vfill
              {\small \@author}%
789
790
            \end{center}
          \else
791
          \vskip 60\p@
792
          \begin{center}%
793
            {\LARGE \@title \par}%
794
795
            \vskip 3em%
            {\large
796
              \lineskip .75em
797
798
              \begin{tabular}[t]{c}%
                \@author
799
              \end{tabular}\par}%
800
801
            \vskip 1.5em
            {\large \@date \par}%
802
803
          \end{center}%
          \fi
804
805
          \par
          \@thanks\vfil\null
806
       \end{titlepage}%
807
808
       \setcounter{footnote}{0}%
       \global\let\thanks\relax
809
       \global\let\maketitle\relax
810
811
       \global\let\@thanks\@empty
812
       \global\let\@author\@empty
       \global\let\@date\@empty
813
814
       \global\let\@title\@empty
       \global\let\title\relax
815
       \global\let\author\relax
816
       \global\let\date\relax
817
       \global\let\and\relax
818
```

```
820 \else
                  \newcommand{\maketitle}{\par
             821
             822
                    \begingroup
                      \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
             823
                      824
                      \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\zw
             825
             826
                        \parindent 1\zw\noindent
                        \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\zw}##1}%
             827
             828
                        \ifnum \col@number=\@ne
             829
                          \@maketitle
             830
             831
                        \else
                         \twocolumn[\@maketitle]%
             832
             833
                        \fi
             834
                      \else
                        \newpage
             835
                        \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
             836
                        \@maketitle
             837
                      \fi
             838
             839
                      \plainifnotempty
                      \@thanks
             840
             841
                    \endgroup
                    \setcounter{footnote}{0}%
             842
                    \global\let\thanks\relax
             843
                    \global\let\maketitle\relax
             844
                    \global\let\@thanks\@empty
             845
                    \global\let\@author\@empty
             846
             847
                    \global\let\@date\@empty
                    \global\let\@title\@empty
             848
                    \global\let\title\relax
             849
             850
                    \global\let\author\relax
                    \global\let\date\relax
             851
             852
                    \global\let\and\relax
                 }
             853
            独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
\@maketitle
                  \def\@maketitle{%
             854
                    \newpage\null
             855
                    \vskip 2em
             856
                    \begin{center}%
             857
             858
                      \let\footnote\thanks
                      {\LARGE \@title \par}%
             859
                      \vskip 1.5em
             860
             861
                      {\large
                        \lineskip .5em
            862
             863
                        \begin{tabular}[t]{c}%
                          \@author
             864
                        \end{tabular}\par}%
             865
```

}%

819

```
866
                       \vskip 1em
867
                       {\large \@date}%
868
                  \end{center}%
                  \par\vskip 1.5em
869
870 (article j kiyou)
                                                     \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
            }
871
872 \fi
873 (/article j book j kiyou)
874 (*jspf)
875 \newcommand{\maketitle}{\par
876
            \begingroup
                  \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
877
                  \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
878
                  \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\zw
879
                       \parindent 1\zw\noindent
880
                       \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\zw}##1}%
881
                       \twocolumn[\@maketitle]%
882
                  \plainifnotempty
883
884
                  \@thanks
            \endgroup
885
886
            \setcounter{footnote}{0}%
            \global\let\thanks\relax
887
888
            \global\let\maketitle\relax
889
            \global\let\@thanks\@empty
            \global\let\@author\@empty
890
            \global\let\@date\@empty
891
892 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
            \global\let\title\relax
893
            \global\let\author\relax
894
            \global\let\date\relax
895
            \global\let\and\relax
896
897
            \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
                  \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\zw \parindent -3\zw}%
898
899
                  \footnotetext[0]{\itshape\authors@mail}%
            fi
900
            \global\let\authors@mail\@undefined}
901
902 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\m
            \newpage\null
903
            \vskip 6em % used to be 2em
904
            \begin{center}
905
                  \let\footnote\thanks
906
                  \ifx\@title\@undefined\else{\LARGE\headfont\@title\par}\fi
907
                  \lineskip .5em
908
                  \ifx\@author\@undefined\else
909
910
                       \vskip 1em
911
                      \begin{tabular}[t]{c}%
                            \@author
912
                       \end{tabular}\par
913
```

914

\fi

```
\ifx\@etitle\@undefined\else
915
916
         \vskip 1em
917
         {\large \@etitle \par}%
       \fi
918
       \ifx\@eauthor\@undefined\else
919
         \vskip 1em
920
         \begin{tabular}[t]{c}%
921
922
           \@eauthor
         \end{tabular}\par
923
924
       \vskip 1em
925
       \@date
926
     \end{center}
927
     \vskip 1.5em
928
     \centerline{\box\@abstractbox}
929
     \ifx\@keywords\@undefined\else
       \vskip 1.5em
931
       \centerline{\parbox{157mm}{\textKeywords:}}\ \small{Qkeywords}}
932
933
    \fi
    \vskip 1.5em}
934
935 (/jspf)
```

8.2 章・節

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして * と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} * [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です(例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。 この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。 負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下の空きです。 負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

* この*印がないと、見出し番号を付け、見出し番号のカウンタに1を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として 定義されます。

次は \@startsection の定義です。 情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

```
936 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
    \if@noskipsec \leavevmode \fi
    \par
938
939 % 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
940 \@tempskipa #4\relax
941 % \Qafterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
    \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
943 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
    \ifdim \@tempskipa <\z@
944
      \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
    \fi
946
    \if@nobreak
947
      \everypar{}%
948
    \else
949
      \addpenalty\@secpenalty
951%次の行は削除
952 %
      \addvspace\@tempskipa
953% 次の \noindent まで追加
954
      \ifdim \@tempskipa >\z@
        \if@slide\else
955
956
          \null
          \vspace*{-\baselineskip}%
957
        \vskip\@tempskipa
959
      \fi
960
    \fi
961
    \noindent
962
963% 追加終わり
    \@ifstar
964
965
      {\@ssect{#3}{#4}{#5}{#6}}%
      {\d}^{\d}_{\d}^{\#2}_{\#3}_{\#5}_{\#6}}
966
 \Osect と \Oxsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変
えてあります。
967 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
    \ifnum #2>\c@secnumdepth
      \let\@svsec\@empty
969
970
      \refstepcounter{#1}%
971
      \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
972
973 \fi
974 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
975 \@tempskipa #5\relax
976% 条件判断の順序を入れ換えました
```

```
\left( \cdot \right) = \left( \cdot \right)
977
978
       \def\@svsechd{%
979
          #6{\hskip #3\relax
          \@svsec #8}%
980
          \csname #1mark\endcsname{#7}%
981
          \addcontentsline{toc}{#1}{%
982
           \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
983
              \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
985
           #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
986
987
     \else
       \begingroup
988
          \interlinepenalty \@M % 下から移動
989
          #6{%
990
991
            \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
992 %
           \interlinepenalty \@M % 上に移動
           #8\@@par}%
993
       \endgroup
994
995
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
       \addcontentsline{toc}{#1}{%
996
997
          \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
           \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
998
999
          #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1000
     \fi
1001
1002
     \c \xspace (45)
  二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され、 それ
以降は前者が実行されます。
  [2011-10-05 LTJ] LuaTEX-ja では \everyparhook は不要なので削除。
1003 \def\@xsect#1{%
1004% 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #1\relax
1006 % 条件判断の順序を変えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1007
       \@nobreakfalse
1008
1009
       \global\@noskipsectrue
       \everypar{%
1010
          \if@noskipsec
1011
           \global\@noskipsecfalse
1012
1013
           {\setbox\z@\lastbox}%
1014
           \clubpenalty\@M
1015
           \begingroup \@svsechd \endgroup
           \unskip
1016
1017
           \@tempskipa #1\relax
           \hskip -\@tempskipa\@inhibitglue
1018
1019
           \clubpenalty \@clubpenalty
1020
           \everypar{}%
1021
```

```
1027
                      \fi
                      \if@slide
                 1028
                 1029
                        {\vskip-6pt\maybeblue\hrule height0pt depth1pt\vskip7pt\relax}%
                      \fi
                 1030
                      \par % 2000-12-18
                 1031
                 1032
                      \ignorespaces}
                 1033 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%}
                      \@tempskipa #3\relax
                 1034
                      \ifdim \@tempskipa<\z@
                 1035
                 1036
                        \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
                 1037
                        \begingroup
                 1038
                          #4{%
                 1039
                 1040
                            \@hangfrom{\hskip #1}%
                 1041
                              \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
                 1042
                        \endgroup
                 1043
                      \fi
                      \@xsect{#3}}
                 1044
                   ■柱関係の命令
     \chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。 \chaptermark 以外は IATEX 本体
                  で定義済みです。
     \sectionmark
                 1045 \newcommand*\chaptermark[1]{}
  \subsectionmark
                 1046 % \newcommand*{\sectionmark}[1]{}
\subsubsectionmark
                 1047 % \newcommand*{\subsectionmark}[1]{}
   1049 % \newcommand*{\paragraphmark}[1]{}
\subparagraphmark
                 1050 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                   ■カウンタの定義
   \c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで 番号を付けるかを決めるカウンタです。
                 1051 \langle ! book \rangle \
                 1052 \langle book \\ \setcounter{secnumdepth}{2}
                 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。 これは
       \c@chapter
                 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
       \c@section
                 1053 \newcounter{part}
    \c@subsection
                 1054 (book)\newcounter{chapter}
 \c@subsubsection
                 1055 \langle \mathsf{book} \rangle  [chapter]
     \c@paragraph 1056 \langle! book \newcounter{section}
  \c@subparagraph
```

 $fi}%$

\par \nobreak
\vskip \@tempskipa

\@afterheading

\else

1022 1023

1024

1025

1026

```
1057 \newcounter{subsection} [section]
                                                                              1058 \newcounter{subsubsection}[subsection]
                                                                              1059 \newcounter{paragraph} [subsubsection]
                                                                              1060 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
                                      \thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                                                                                        カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
                         \thechapter
                         \thesection
                                                                                                                                                                                                    1, 2, 3, ...
                                                                                                        \arabic{COUNTER}
            \thesubsection
                                                                                                        \roman{COUNTER}
                                                                                                                                                                                                   i, ii, iii, ...
\thesubsubsection
                                                                                                                                                                                                  I, II, III, ...
                                                                                                        \Roman{COUNTER}
                                                                                                                                                                                                   a, b, c, ...
                                                                                                        \alph{COUNTER}
                 \theparagraph
                                                                                                        \Alph{COUNTER}
                                                                                                                                                                                                    A, B, C, ...
    \thesubparagraph
                                                                                                                                                                                             一, 二, 三, ...
                                                                                                        \kansuji{COUNTER}
                                                                                        以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。
                                                                              1061 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                                                                              1062 \langle ! book \rangle \% \ \mbox{\label{look} \label{look} \ \mbox{\look} \mbox{\look} \ \mbox{\look} \ \mbox{\look} \mbox{\look} \ \mbox{\look} \mbox{\look} \ \mbox{\look} \mbox{
                                                                              1063 (!book)\renewcommand{\thesection}{\presectionname\@arabic\c@section\postsectionname}
                                                                              1065 (*book)
                                                                              1066 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                                                                              1067 \verb|\command{\thesection}{\thechapter.\color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="color="
                                                                              1068 \verb|\command{\the subsection}{\the section.\color=0.0233} \\
                                                                              1069 (/book)
                                                                              1070 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                                                                                                           \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
                                                                              1072 \renewcommand{\theparagraph}{%
                                                                                                           \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                                                                              1074 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                                                                                                          \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
                                                                              1075
                                                                               \@chapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
                                 \@chapapp
                                                                                        \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
                                 \@chappos
                                                                                        \appendix は \@chapapp を \appendixname に、 \@chappos を空に再定義します。
                                                                                        [2003-03-02] \@secapp は外しました。
                                                                              1076 \ \langle book \rangle \ (\c) \ (\c
                                                                              1077 \langle book \rangle \newcommand{\Qchappos}{\postchaptername}
                                                                                     ■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」, それ以外が「前付」「後付」です。
                     \frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。
                                                                              1078 (*book)
                                                                              1079 \newcommand\frontmatter{%
```

1080 \if@openright

```
\cleardoublepage
           1081
           1082
                \else
           1083
                 \clearpage
           1084
                \fi
                \@mainmatterfalse
           1085
                \pagenumbering{roman}}
           1086
          ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。
\mainmatter
           1087 \newcommand\mainmatter{%
           1088 % \if@openright
                  \cleardoublepage
           1089
           1090 % \else
           1091 %
                 \clearpage
           1092 % \fi
           1093
               \@mainmattertrue
                \pagenumbering{arabic}}
           1094
           章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。
           1095 \newcommand\backmatter{\%
           1096
                \if@openright
           1097
                  \cleardoublepage
           1098
               \else
           1099
                 \clearpage
               \fi
           1100
               \@mainmatterfalse}
           1101
           1102 (/book)
            ■部
     \part 新しい部を始めます。
             \secdef を使って見出しを定義しています。 このマクロは二つの引数をとります。
                \secdef{星なし}{星あり}
           星なし * のない形の定義です。
           星あり * のある形の定義です。
             \secdef は次のようにして使います。
              \def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }
                         [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義
              \def\CMDA
              \def\CMDB
                                   % \chapter*{...} の定義
                         #1{....}
             まず book クラス以外です。
           1103 (*! book)
           1104 \newcommand\part{%
```

\if@noskipsec \leavevmode \fi

1105 1106

1107

\par

 $\verb|\addvspace{4ex}||$

```
\if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
       1108
       1109
             \secdef\@part\@spart}
       1110 (/! book)
          book スタイルの場合は、少し複雑です。
       1111 (*book)
       1112 \newcommand\part{%
       1113
             \if@openright
               \cleardoublepage
       1114
       1115
             \else
       1116
               \clearpage
       1117
             \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
       1118
             \if@twocolumn
       1119
       1120
               \onecolumn
               \@restonecoltrue
       1121
       1122
               \@restonecolfalse
       1123
       1124
             \fi
       1125
             \null\vfil
             \secdef\@part\@spart}
       1126
       1127 (/book)
\Opart 部の見出しを出力します。 \bfseries を \headfont に変えました。
          book クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき 部番号を付けます。
       1128 (*! book)
       1129 \def\@part[#1]#2{%
             \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
       1130
               \refstepcounter{part}%
       1131
               \addcontentsline{toc}{part}{%
       1132
                 \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\zw}#1}%
       1133
             \else
       1134
       1135
               \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
             \fi
       1136
       1137
             \markboth{}{}%
             {\parindent\z@
       1138
       1139
               \raggedright
               \interlinepenalty \@M
       1140
       1141
               \normalfont
       1142
               \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
       1143
                 \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
                 \par\nobreak
       1144
       1145
               \huge \headfont #2%
       1146
               \markboth{}{}\par}%
       1147
       1148
             \nobreak
             \vskip 3ex
       1149
             \@afterheading}
       1150
       1151 (/! book)
```

```
book クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
          1152 (*book)
          1153 \def\@part[#1]#2{%
                \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
          1154
                   \refstepcounter{part}%
          1155
                   \verb|\addcontentsline{toc}{part}{%|}
          1156
                     \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\zw}#1}%
          1157
          1158
                   \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
          1159
          1160
                \fi
          1161
                \markboth{}{}%
                {\centering
          1162
          1163
                  \interlinepenalty \@M
                   \normalfont
          1164
                   \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
          1165
                     \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
          1166
                     \par\vskip20\p@
          1167
                  \fi
          1168
                   \Huge \headfont \#2\pi\
          1169
                \@endpart}
          1170
          1171 \langle /book \rangle
  \@spart 番号を付けない部です。
          1172 (*! book)
          1173 \def\@spart#1{{%
          1174
                   \parindent \z@ \raggedright
                   \interlinepenalty \@M
          1175
          1176
                   \normalfont
          1177
                   \huge \headfont #1\par}%
                \nobreak
          1178
                \vskip 3ex
          1179
                \@afterheading}
          1180
          1181 (/! book)
          1182 \langle *book \rangle
          1183 \def\@spart#1{{%
          1184
                  \centering
          1185
                  \interlinepenalty \@M
                   \normalfont
          1186
                   \Huge \headfont #1\par}%
          1188
                \@endpart}
          1189 (/book)
\Cendpart \Cendpart と \Cendpart の最後で実行されるマクロです。 両面印刷のときは白ページを追加し
           ます。二段組のときには、二段組に戻します。
          1190 (*book)
          1191 \def\@endpart{\vfil\newpage}
                \if@twoside
          1192
          1193
                  \null
```

```
1196
              \fi
         1197
               \if@restonecol
                 \twocolumn
         1198
              \fi}
         1199
         1200 (/book)
           ■章
\chapter 章の最初のページスタイルは,全体が empty でなければ plain に します。また, \@topnum
         を 0 にして、 章見出しの上に図や表が来ないようにします。
         1201 (*book)
         1202 \newcommand{\chapter}{\%
               \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi
               \plainifnotempty % 元: \thispagestyle{plain}
         1204
               \global\@topnum\z@
         1205
               \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
         1206
               \secdef
         1207
                 {\@omit@numberfalse\@chapter}%
         1208
         1209
                 {\@omit@numbertrue\@schapter}}
         章見出しを出力します。 secnumdepth が 0 以上かつ \@mainmatter が真のとき章番号を
         出力します。
         1210 \def\@chapter[#1]#2{%
              \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                 \if@mainmatter
         1212
         1213
                   \refstepcounter{chapter}%
         1214
                   \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                   \addcontentsline{toc}{chapter}%
         1215
         1216
                     {\protect\numberline
                    \% {\if@english\thechapter\else\chapapp\thechapter\chappos\fi}\%
         1217
                     {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
         1218
         1219
                    #1}%
         1220
                 \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
         1221
                 \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
         1222
         1223
               \fi
         1224
               \chaptermark{#1}%
               \verb|\addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\p0}}|%
         1225
               \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\p0}}%
         1226
               \if@twocolumn
         1227
                 \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
         1228
         1229
                 \@makechapterhead{#2}%
         1230
         1231
                 \@afterheading
         1232
              \fi}
```

1194

1195

\thispagestyle{empty}%

\newpage

```
\@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。 \bfseries を \headfont に変えました。
                                               1233 \def\@makechapterhead#1{%
                                               1234
                                                              \vspace*{2\Cvs}% 欧文は 50pt
                                               1235
                                                              {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                                                                   \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                                               1236
                                               1237
                                                                        \if@mainmatter
                                                                             \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                                               1238
                                               1239
                                                                             \par\nobreak
                                               1240
                                                                             \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                                                                        \fi
                                               1241
                                               1242
                                                                   \fi
                                                                   \interlinepenalty\@M
                                               1243
                                                                   \Huge \headfont #1\par\nobreak
                                               1244
                                               1245
                                                                   \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                   \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。 \chaptermark を補いました。
                                               1246 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mb
                                                              \chaptermark{#1}%
                                               1247
                                               1248
                                                              \if@twocolumn
                                                                   \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                                               1249
                                               1250
                                               1251
                                                                   \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                                               1252
                                                              fi
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                                               1253 \def\@makeschapterhead#1{%
                                                              \vspace*{2\Cvs}% 欧文は 50pt
                                               1254
                                               1255
                                                              {\parindent \z@ \raggedright
                                               1256
                                                                   \normalfont
                                                                   \interlinepenalty\@M
                                               1257
                                                                   \Huge \headfont #1\par\nobreak
                                               1258
                                                                   \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                                               1259
                                               1260 (/book)
                                                     ■下位レベルの見出し
                        \section 欧文版では \@startsection の第4引数を負にして最初の段落の 字下げを禁止しています
                                                が、和文版では正にして字下げするようにしています。
                                                      段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。
                                               1261 \if@twocolumn
                                               1262 \newcommand{\section}{%
                                               1263 (jspf)\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                                               1264
                                                                   \@startsection{section}{1}{\z@}%
                                               1265 (! kiyou)
                                                                                    \{0.6\Cvs\}\{0.4\Cvs\}\%
                                               1266 (kiyou)
                                                                                 {\Cvs}{0.5\Cvs}%
```

{\normalfont\large\headfont\@secapp}}

{\normalfont\large\headfont\raggedright}}

1267 **%** 1268

1269 \else

```
\newcommand{\section}{%
            1270
            1271
                  \if@slide\clearpage\fi
            1272
                  \ensuremath{\verb| 0startsection{section}{1}{\ensuremath{\verb| 1}{\ensuremath{\verb| 20}{\ensuremath{\>|}}}}
                  {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
            1273
                  {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
                  {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
            1275 %
                  {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
            1276
            1277 \fi
  \subsection 同上です。
            1278 \if@twocolumn
                 1279
            1280
                  {\z@}{\z@}%
                  {\normalfont\normalsize\headfont}}
            1281
            1282 \else
                1283
            1284
                  {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
                  {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
                  {\normalfont\large\headfont}}
            1286
            1287 \fi
\subsubsection
            1288 \if@twocolumn
            1289
                 {\z_0}{\z_0}%
            1290
            1291
                  {\normalfont\normalsize\headfont}}
            1292 \else
            1293
                 {\color=0.5\cdp \ensuremath{\color=0.5\cdp}\%}
            1294
            1295
                  {\z@}%
                  {\normalfont\normalsize\headfont}}
            1296
            1297 \fi
   \paragraph 見出しの後ろで改行されません。
            1298 \if@twocolumn
                1299
                  {\z@}{-1\zw}% 改行せず 1\zw のアキ
            1300
            1301 (jspf)
                      {\normalfont\normalsize\headfont}}
                       {\normalfont\normalsize\headfont ■}}
            1302 (! jspf)
            1303 \else
                 1304
            1305
                  {0.5\Cvs \qplus.5\Cdp \qminus.2\Cdp}%
                  {-1\zw}% 改行せず 1\zw のアキ
            1306
            1307 \langle \mathsf{jspf} \rangle
                      {\normalfont\normalsize\headfont}}
                       {\normalfont\normalsize\headfont ■}}
            1308 (! jspf)
            1309 \fi
\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
```

```
1311 {\z0}{-1\zw}%
```

1312 {\normalfont\normalsize\headfont}}

8.3 リスト環境

第 k レベルのリストの初期化をするのが \@listk です (k=i,ii,iii,iv)。 \@listk は \leftmargin を \leftmargink に設定します。

\leftmargini 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが, ここでは全角幅の 2 倍に しました。

[2002-05-11] 3\zw に変更しました。

[2005-03-19] 二段組は 2\zw に戻しました。

- 1313 \if@slide
- 1314 \setlength\leftmargini{1\zw}
- 1315 **\else**
- 1316 \if@twocolumn
- 1317 \setlength\leftmargini{2\zw}
- 1318 \else
- 1319 \setlength\leftmargini{3\zw}
- 1320 \fi
- 1321 \fi

\leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep と それぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくする こ

\leftmarginiii とになっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。

\leftmarginiv 1322 \i

1322 \if@slide 1323 \setlength\leftmarginii {1\zw}

\leftmarginvi 1325

- 1325 \setlength\leftmarginiv {1\zw}
- 1326 \setlength\leftmarginv $\{1\zw\}$
- 1327 \setlength\leftmarginvi {1\zw}
- 1328 **\else**
- 1329 \setlength\leftmarginii $\{2\zw\}$
- 1330 \setlength\leftmarginiii{2\zw}
- 1331 \setlength\leftmarginiv {2\zw}
- 1332 \setlength\leftmarginv {1\zw}
- 1333 \setlength\leftmarginvi {1\zw}
- 1334 **\fi**

\labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。 \labelwidth はラベルの幅です。 これは二

\labelwidth 分に変えました。

1335 \setlength \labelsep {0.5\zw} % .5em
1336 \setlength \labelwidth{\leftmargini}

 $1337 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}$

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合、 \parskip と \topsep に \partopsep を 加えた値だ け縦方向の空白ができます。 0 に改変しました。

```
1338 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}
\@beginparpenalty リストや段落環境の前後,リスト項目間に挿入されるペナルティです。
 \@endparpenalty 1339 \@beginparpenalty -\@lowpenalty
               1340 \@endparpenalty
                                  -\@lowpenalty
   \@itempenalty
               1341 \@itempenalty
                                  -\@lowpenalty
        \@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などの トップレベルの定義を
               します。 この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます (たとえば \small
        \@listI
                の中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せ
                るように、 \@listI で \@listi のコピーを保存します。 元の値はかなり複雑ですが、ここ
                では簡素化してしまいました。 特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてあり
                ます。 アスキーの標準スタイルでは トップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ 最
                初と最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。
                  [2004-09-27] \topsep のグルー^{+0.2}_{-0.1} \baselineskip を思い切って外しました。
               1342 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
               1343
                    \parsep \z@
               1344 \topsep 0.5\baselineskip
               1345 \itemsep \z@ \relax}
               1346 \left| \text{OlistI} \right|
                  念のためパラメータを初期化します(実際には不要のようです)。
               1347 \@listi
       \@listii 第 2~6 レベルのリスト環境のパラメータの設定です。
      \@listiii 1348 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
                    \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep
               1349
       \@listiv
               1350
                    \topsep \z@
        \parsep \z@
                    \itemsep\parsep}
       \@listvi 1352
               1353 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii
                    \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep
               1354
               1355
                    \topsep \z@
                    \parsep \z@
               1356
               1357
                    \itemsep\parsep}
               1358 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv
                               \labelwidth\leftmarginiv
               1359
                               \advance\labelwidth-\labelsep}
               1360
               1361 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv
               1362
                               \labelwidth\leftmarginv
                               \advance\labelwidth-\labelsep}
               1363
               1364 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi
```

\labelwidth\leftmarginvi
\advance\labelwidth-\labelsep}

1365

1366

■enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumiii, enumiv を使います。enumn は第 n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。 これらは IATEX 本体(ltlists.dtx 参照) で定義済み

\theenumii ですが、ここでは表し方を変えています。 \@arabic, \@alph, \@roman, \@Alph はそれ

\theenumiii ぞれ 算用数字,小文字アルファベット,小文字ローマ数字,大文字アルファベット で番号

を出力する命令です。

1367 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}

1368 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}

1369 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}

1370 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。 第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付

\labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。 第2レベルの番号のかっこは和文用

\labelenumiii に換え、 その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で 取り除いています。

 $\verb|\labelenumiv| 1371 \newcommand{\labelenumi} {\labelenumi.}$

1372 \newcommand{\labelenumii}{\inhibitglue (\theenumii) \inhibitglue}

1373 $\mbox{\newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}}$

1374 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}

\pQenumii \pQenumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの 項目が参照されるときの

\p@enumiii 書式です。 これも第2レベルは和文用かっこにしました。

 $\label{eq:power_power} $$ \p{\ensum} 1375 \ensum{\p{\ensum} (\p{\ensum} i)} {\hfill} $$$

1376 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi\inhibitglue (\theenumii) }

1377 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}

■itemize 環境

 \labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。

\labelitemii 1378 \newcommand\labelitemi{\textbullet}

1379 \newcommand\labelitemii{\normalfont\bfseries \textendash}

\labelitemiii 1380 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}

 $\verb|\labelitemiv| 1381 \verb|\newcommand| labelitemiv{\text|\textperiodcentered}|$

■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭が それに引きずられて左に 出てしまいます。 これを解決した新しい description の実装です。

1382 \newenvironment{description}{%

1383 \list{}{%

1384 \labelwidth=\leftmargin

1385 \labelsep=1\zw

1386 \advance \labelwidth by -\labelsep

1387 \let \makelabel=\descriptionlabel\}\{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。 好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\zw}) を入れるのもいいと思います。

 $1388 \mbox{ } \mbox$

■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。 abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので, list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

```
1389 (*book)
1390 \newenvironment{abstract}{%
1391
     \begin{list}{}{%
        \listparindent=1\zw
1392
        \itemindent=\listparindent
1393
1394
        \rightmargin=0pt
1395
        \leftmargin=5\zw}\item[]}{\end{list}\vspace{\baselineskip}}
1396 (/book)
1397 (*article j kiyou)
1398 \newbox\@abstractbox
1399 \if@titlepage
     \newenvironment{abstract}{%
1400
1401
        \titlepage
        \null\vfil
1402
        \@beginparpenalty\@lowpenalty
1403
        \begin{center}%
1404
1405
          \headfont \abstractname
          \@endparpenalty\@M
1406
        \end{center}}%
1408
      {\par\vfil\null\endtitlepage}
1409 \else
1410
      \newenvironment{abstract}{%
        \if@twocolumn
1411
          \ifx\maketitle\relax
1412
            \section*{\abstractname}%
1413
          \else
1414
            \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
1415
            \begin{minipage}[b]{\textwidth}
1416
              \small\parindent1\zw
1417
              \begin{center}%
1418
                1419
              \end{center}%
1420
              \left\{ \right\} 
1421
                \listparindent\parindent
1422
1423
                \itemindent \listparindent
                \rightmargin \leftmargin}%
1424
```

```
\item\relax
         1425
                   \fi
         1426
         1427
                \else
                   \small
         1428
                   \begin{center}%
         1429
                     1430
                   \end{center}%
         1431
         1432
                   \left\{ \right\} 
                    \listparindent\parindent
         1433
                     \itemindent \listparindent
         1434
                     \rightmargin \leftmargin}%
         1435
                   \item\relax
         1436
         1437
                 \fi}{\if@twocolumn
                   \ifx\maketitle\relax
         1438
         1439
                     \endlist\end{minipage}\egroup
         1440
         1441
                   \fi
                 \else
         1442
                   \endlist
         1443
         1444
                 \fi}
         1445 \fi
         1446 ⟨/article j kiyou⟩
         1447 \langle *jspf \rangle
         1448 \newbox\@abstractbox
         1449 \newenvironment{abstract}{%
         1450
               \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
               1451
         1452
         1453
                \if@english \parindent6mm \else \parindent1\zw \fi}%
              {\end{minipage}\egroup}
         1454
         1455 \langle /jspf \rangle
           ■キーワード
keywords キーワードを準備する環境です。 実際の出力は \maketitle で行われます。
         1456 (*jspf)
         1457 %\newbox\@keywordsbox
         1458 \nnewenvironment{keywords}{%
         1459 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
         1460 % \begin{minipage}[b]{157mm}{\sffamily Keywords:}\par
                  \small\parindent0\zw}%
         1462 % {\end{minipage}\egroup}
         1463 \langle /jspf \rangle
           ■verse 環境
  verse 詩のための verse 環境です。
```

1464 \newenvironment{verse}{%

```
1465 \let \\=\@centercr
```

- 1466 \list{}{%
- 1467 \itemsep \z@
- 1468 \itemindent -2\zw % 元: -1.5em
- 1469 \listparindent\itemindent
- 1470 \rightmargin \z@
- 1471 \advance\leftmargin 2\zw}% 元: 1.5em
- 1472 \item\relax}{\endlist}

■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を 1.5 em から \parindent に変えました。 また、右マージンを 0 にしました。

```
1473 \newenvironment{quotation}{\%}
```

- 1474 \list{}{%
- 1475 \listparindent\parindent
- 1476 \itemindent\listparindent
- 1477 \rightmargin \z0}%
- $1478 \quad \text{item}\$ {\endlist}

■quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、 quotation 環境と同じです。

- 1479 \newenvironment{quote}%
- 1480 {\list{}{\rightmargin\z@}\item\relax}{\endlist}

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

\newtheorem{definition}{定義}

\newtheorem{axiom}{公理}

\newtheorem{theorem}{定理}

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、\itshape を削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1\zw にし、括弧を全角 にしました。

 $1481 \ensurement{$\def\@begintheorem#1#2{\trivlist\labelsep=1\zw}}$

1482 \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2}]}

 $1483 \ensurement{$\land$} 1483 \ensurement{$\land$$

\lambda \item[\hskip \labelsep{\headfont #1\ #2 (#3) }]}

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

- 1485 \newenvironment{titlepage}{\%
- $1486 \langle book \rangle$ \cleardoublepage
- 1487 \if@twocolumn
- 1488 \@restonecoltrue\onecolumn
- 1489 \else

```
1490
          \@restonecolfalse\newpage
1491
1492
        \thispagestyle{empty}%
        \setcounter{page}\@ne
1493
1494
      {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
1495
        \if@twoside\else
1496
1497
          \setcounter{page}\@ne
        \fi}
1498
```

■付録

```
\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。
```

```
1499 \langle *! book \rangle
1500 \newcommand{\appendix}{\par
     \setcounter{section}{0}%
1501
1502
     \setcounter{subsection}{0}%
1503
     \gdef\presectionname{\appendixname}%
1504
     \gdef\postsectionname{}%
1505 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]
     1506
     1507
1508 (/! book)
1509 (*book)
1510 \newcommand{\appendix}{\par
     \setcounter{chapter}{0}%
1511
     \setcounter{section}{0}%
1512
     \gdef\@chapapp{\appendixname}%
1513
    \gdef\@chappos{}%
1514
     \gdef\thechapter{\@Alph\c@chapter}}
1515
1516 (/book)
```

8.4 パラメータの設定

■array と tabular 環境

■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

1521 \setlength\tabbingsep{\labelsep}

■minipage 環境

\@mpfootins minipage 環境の脚注の \skip\@mpfootins は通常のページの \skip\footins と同じ働きをします。

 $1522 \ \ = \ \ \$

■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

1523 \setlength\fboxsep{3\p0} 1524 \setlength\fboxrule{.4\p0}

■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

1525 $\langle ! book \rangle \$ \text{ renewcommand } the equation {\Qarabic\cQequation}

 $1526 \langle *book \rangle$

1527 \@addtoreset{equation}{chapter}

 $1528 \mbox{ \lower}$

1529 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

1530 (/book)

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。 デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

1531 % \setlength\jot{3pt}

\Qeqnnum 数式番号の形式です。 デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\inhibitglue (\theequation) \inhibitglue のように和文かっこ を使うことも可能です。

1532 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

1533 % \def\tagform@#1{\maketag@@@{ (\ignorespaces#1\unskip\@@italiccorr) }}

8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを 扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置(float placement specifier)です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...)でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption $\langle num \rangle \langle text \rangle$ キャプションを出力するマクロです。 $\langle num \rangle$ は \fnum@... の生成する番号, $\langle text \rangle$ はキャプションのテキストです。 テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

■figure 環境

\c@figure 図番号のカウンタです。

\thefigure 図番号を出力するコマンドです。

1534 $\langle *! book \rangle$

1535 \newcounter{figure}

1536 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}

1537 (/! book)

1538 (*book)

1539 \newcounter{figure}[chapter]

1540 \renewcommand \thefigure

1541 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}

 $1542 \langle /\mathsf{book} \rangle$

\fps@figure figure のパラメータです。 \figurename の直後に ~ が入っていましたが、 ここでは外し

\ftype@figure ました。

\ext@figure 1543 \def\fps@figure{tbp}

1544 \def\ftype@figure{1} \fnum@figure

1545 \def\ext@figure{lof}

 $1546 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbo$

figure *形式は段抜きのフロートです。

figure* 1547 \newenvironment{figure}%

1548 {\@float{figure}}%

1549 {\end@float}

1550 \newenvironment{figure*}%

1551 {\@dblfloat{figure}}%

1552 {\end@dblfloat}

■table 環境

\c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。 アスキー版では \thechapter. が

\thetable \thechapter{}・になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。

1553 $\langle *! book \rangle$

1554 \newcounter{table}

1555 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}

```
1556 \langle /! book \rangle
1557 \langle *book \rangle
1558 \newcounter{table}[chapter]
1559 \renewcommand \thetable
1560 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
```

1560 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table} 1561 $\langle \text{book} \rangle$

\fps@table table のパラメータです。 \tablename の直後に ~ が入っていましたが、 ここでは外しま

\ftype@table \talin to.

1565 \def\fnum@table{\tablename\nobreak\thetable}

table * は段抜きのフロートです。

table* 1566 \newenvironment{table}%

1567 {\@float{table}}% 1568 {\end@float}

1569 \newenvironment{table*}%

1570 {\@dblfloat{table}}%

1571 {\end@dblfloat}

8.6 キャプション

\@makecaption \caption コマンドにより呼び出され、 実際にキャプションを出力するコマンドです。 第 1 引数はフロートの番号、 第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。 **\belowcaptionskip** が 0 になっ

\belowcaptionskip ていましたので、 キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表が くっついてしまうのを直しました。

 $1572 \neq 1572$

1573 \newlength\belowcaptionskip

1574 \setlength\abovecaptionskip{5\p0} % 元: 10\p0

1575 \setlength\belowcaptionskip{5\p0} % 元: 0\p0

実際のキャプションを出力します。 オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

 $_{1576} \; \langle *! \, \mathsf{jspf} \rangle$

1577 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small

1578 % \advance\leftskip1cm

1579 % \advance\rightskip1cm

1580 % \vskip\abovecaptionskip

1581 % \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\zw\relax #2}%

```
\ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
1582 %
1583 %
          #1\hskip1\zw\relax #2\par
1584 %
1585 %
          \global \@minipagefalse
          \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
1586 %
1587 %
        \fi
        \vskip\belowcaptionskip}}
1588 %
1589 \long\def\@makecaption#1#2{{\small
      \advance\leftskip .0628\linewidth
1590
      \advance\rightskip .0628\linewidth
1591
1592
      \vskip\abovecaptionskip
      1593
     \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
1594
     #1\hskip1\zw\relax #2\par
1595
1596
     \vskip\belowcaptionskip}}
1597 (/! jspf)
1598 (*jspf)
1599 \long\def\@makecaption#1#2{%
1600
     \vskip\abovecaptionskip
      \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
1601
1602
      \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
        {\small\sffamily
1603
1604
          \list{#1}{%
            \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
1605
            \itemsep
1606
            \itemindent \z@
1607
            \labelsep
                        \z0
1608
            \labelwidth 11mm
1609
1610
            \listparindent\z@
            \leftmargin 11mm}\item\relax #2\endlist}
1611
1612
      \else
1613
        \global \@minipagefalse
        \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
1614
1615
     \vskip\belowcaptionskip}
1616
1617 (/jspf)
```

9 フォントコマンド

ここでは IATEX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。 これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。 これらは互換性のためのもので, できるだけ\text...と \math...を使ってください。

\mc フォントファミリを変更します。

```
\gt ^{1618} \DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathstylength} \tag{1619 \DeclareOldFontCommand{\gt}{\normalfont\gtfamily}{\mathstylength} \tag{54}
```

- $1620 \verb|\DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mbox|\mbox|}$
- $1621 \end{areOldFontCommand{\sf}_{\normalfont\sffamily}{\mathsf}} \label{lem:ormalfont}$
- $1622 \verb|\DeclareOldFontCommand{\tt}{\normalfont\ttfamily}{\mbox|\mbox|}$
- \bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻す コマンドは \mdseries です。
 - $1623 \verb|\DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mbox|\mbox|}$
- \it フォントシェイプを変えるコマンドです。 斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま
- \sl せん (警告メッセージを出力します)。 通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape \sc です。
 - $1624 \ensuremath{\texttt{\loss Manuel}}{\texttt{\loss Manuel}}{\texttt{\loss Mathit}}$
 - $1625 \verb|\DeclareOldFontCommand{\sl}{\normalfont\slshape}{\command\sl}{\command\slshape}{\command\slnape}{\command\slshape}{\command\slshape}{\command\slshape}{\command\slnape}{\command\slshape}{\command\slshape}{\command\slshap$
 - 1626 \DeclareOldFontCommand{\sc}{\normalfont\scshape}{\@nomath\sc}
- \cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。
- \mit 1627 \DeclareRobustCommand*{\cal}{\@fontswitch\relax\mathcal}
 1628 \DeclareRobustCommand*{\mit}{\@fontswitch\relax\mathnormal}

10 相互参照

10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合、上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。 この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに 次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \lo... というコマンドを実行するので、 あらかじめ \lochapter, \location, \lofigure などを 定義しておかなければなりません。 これらの多くは \cdottedtocline コマンドを使って定義します。 これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\Opnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

\Otocrmarg 右マージンです。 \Otocrmarg \geq \Opnumwidth とします。

\@dotsep 点の間隔です (単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。 元は article で 3, その他で 2 でしたが, ここでは一つずつ減らしています。

1629 \newcommand\@pnumwidth{1.55em}

1630 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

1631 \newcommand\@dotsep{4.5}

1632 (!book)\setcounter{tocdepth}{2}

 $1633 \langle book \rangle \$ tocdepth}{1}

■目次

\tableofcontents 目次を生成します。

\js@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)

1634 \newdimen\js@tocl@width

1635 \newcommand{\tableofcontents}{%

1636 (*book)

 $1637 \quad \texttt{\scttowidth\js@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}}\%$

1638 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%

1639 \ifdim\js@tocl@width<\@tempdima \setlength\js@tocl@width{\@tempdima}\fi

1640 \ifdim\js@tocl@width<2\zw \divide\js@tocl@width by 2 \advance\js@tocl@width 1\zw\fi

1641 \if@twocolumn

1642 \@restonecoltrue\onecolumn

1643 \else

1644 \@restonecolfalse

1645 \fi

1646 \chapter*{\contentsname}%

1647 \@mkboth{\contentsname}{}%

1648 (/book)

1649 (*! book)

 $1650 \verb| \settowidth\js@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}| % \cite{Months} with the postsection of the property of the pro$

1651 \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%

1652 \ifdim\js@tocl@width\\@tempdima\relax\setlength\js@tocl@width{\@tempdima}\fi

1654 \section*{\contentsname}%

1655 \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%

 $1656 \langle /! book \rangle$

1657 \@starttoc{toc}%

```
1658 (book) \if@restonecol\twocolumn\fi
           1659 }
  \10part 部の目次です。
           1660 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                 \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
                         \verb|\addpenalty| @ secpenalty|
           1662 (! book)
           1663 \langle \mathsf{book} \rangle
                        \addpenalty{-\@highpenalty}%
                   \addvspace{2.25em \@plus\p@}%
           1664
           1665
                   \begingroup
           1666
                     \parindent \z@
           1667 %
                     \@pnumwidth should be \@tocrmarg
                     \rightskip \@pnumwidth
           1668 %
           1669
                     \rightskip \@tocrmarg
           1670
                     \parfillskip -\rightskip
           1671
                     {\leavevmode
                      \large \headfont
           1672
                      \setlength\@lnumwidth{4\zw}%
           1673
                      1\theta \
           1674
                     \nobreak
           1675
                        \global\@nobreaktrue
           1676 (book)
                        \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
           1677 (book)
           1678
                   \endgroup
           1679
                 fi
\1@chapter
           章の目次です。\@lnumwidth を 4.683\zw に増やしました。
             [2013-12-30] \@lnumwidth を \js@tocl@width から 決めるようにしてみました。(by ts)
           1680 (*book)
           1681 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
           1682
                 \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
           1683
                   \addpenalty{-\@highpenalty}%
           1684
                   \addvspace{1.0em \@plus\p@}
                   \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
           1685 %
           1686
                   \begingroup
                     \parindent\z@
           1687
           1688 %
                     \rightskip\@pnumwidth
                     \rightskip\@tocrmarg
           1689
                     \parfillskip-\rightskip
           1690
                     \leavevmode\headfont
           1691
           1692
                     \% \in \mathbb{S}_{0}
                     \setlength\@lnumwidth{\js@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\zw
           1693
                     \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
           1694
                     #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
           1695
                     \penalty\@highpenalty
           1696
           1697
                   \endgroup
           1698
                \fi}
           1699 (/book)
\l@section 節の目次です。
```

```
1700 (*! book)
                 1701 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                       \ifnum \c@tocdepth >\z@
                         \addpenalty{\@secpenalty}%
                 1703
                         \addvspace{1.0em \@plus\p@}%
                 1704
                         \begingroup
                 1705
                           \parindent\z@
                 1706
                 1707 %
                           \rightskip\@pnumwidth
                           \rightskip\@tocrmarg
                 1708
                 1709
                           \parfillskip-\rightskip
                           \leavevmode\headfont
                 1710
                           %\setlength\@lnumwidth{4\zw}% 元 1.5em [2003-03-02]
                 1711
                           \setlength\@lnumwidth{\js@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2\zw
                 1712
                           \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                 1713
                 1714
                           #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
                 1715
                         \endgroup
                 1716
                      \fi}
                 1717 \langle /! book \rangle
                   インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが、 1\zw, 3.683\zw に変えました。
                 1718 \langle book \rangle % \newcommand*{\l@section}{\@dottedtocline{1}{1\zw}{3.683\zw}}
                   [2013-12-30] 上のインデントは \js@tocl@width から決めるように しました。(by ts)
                 さらに下位レベルの目次項目の体裁です。 あまり使ったことがありませんので、要修正かも
   \l@subsection
                  しれません。
\1@subsubsection
                   [2013-12-30] ここも \js@tocl@width から決めるように してみました。(by ts)
   \1@paragraph
                 1719 (*! book)
\1@subparagraph
                 1720 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                     {\dot{cline}{2}{1.5em}{2.3em}}
                 1721 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
                 1722 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                     {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
                 1723 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
                 1724 %
                 1725 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                     {\dottedtocline{2}{1\zw}{3\zw}}
                 1726 % \newcommand*{\l0subsubsection}{\0dottedtocline{3}{2\zw}{3\zw}}
                 1727 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                     {\@dottedtocline{4}{3\zw}{3\zw}}
                 1728 % \newcommand*{\l0subparagraph} {\0dottedtocline{5}{4\zw}{3\zw}}
                 1729 %
                 1730 \newcommand*{\l@subsection}{%
                               \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima -1\zw
                 1731
                 1732
                               \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3\zw}}
                 1733 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                               \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 0\zw
                 1734
                               \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\zw}}
                 1735
                 1736 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                               \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 1\zw
                 1737
                               \@dottedtocline{4}{\@tempdima}{5\zw}}
                 1738
                 1739 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                               \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 2\zw
                 1740
```

```
\@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\zw}}
                               1742 (/! book)
                               1743 (*book)
                               1744 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                                                     {\@dottedtocline{2}{3.8em}{3.2em}}
                               1745 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
                               1746 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                                                     {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
                               1747 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                               1748 \newcommand*{\l@section}{%
                                                          \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima -1\zw
                               1749
                                                          \@dottedtocline{1}{\@tempdima}{3.683\zw}}
                               1750
                               1751 \newcommand*{\l@subsection}{%
                                                          \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\zw
                               1752
                                                          \cline{2}{\cline{3.5\zw}}
                               1753
                               1754 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                                          \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\zw
                               1755
                                                          \c 3}{\c mpdima}{4.5\z w}
                               1756
                               1757 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                                          \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\zw
                               1758
                               1759
                                                          \cline{4}{\cline{5.5\zw}}
                               1760 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                               1761
                                                          \@tempdima\js@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\zw
                                                          \cline{5}{\cline{5.5\zw}}
                               1762
                               1763 (/book)
       \numberline 欧文版 LATEX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰め で出力する命令で
                                すが、アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数 で幅を決めるよ
        \@lnumwidth
                                 うに再定義しています。 後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace
                                を入れておきました。
                               1764 \newdimen\@lnumwidth
                               1765 \end{figure} $$1765 \end{figure} $$1765
\@dottedtocline IATEX 本体 (ltsect.dtx 参照) での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
                                変えています。
                               1766 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                           \ \vskip \z0 \old 2\p0
                               1767
                                           {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                               1768
                               1769
                                               \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                                             \interlinepenalty\@M
                               1770
                                             \leavevmode
                               1771
                               1772
                                             \@lnumwidth #3\relax
                                             \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                               1773
                                              {#4}\nobreak
                               1774
                                              \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep
                               1775
                                                    mu$}\hfill \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                               1776
                                                         \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                               1777
```

■図目次と表目次

1741

```
\listoffigures 図目次を出力します。
                1778 \newcommand{\listoffigures}{%
                1779 (*book)
                1780
                     \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                      \else\@restonecolfalse\fi
                1781
                1782
                      \chapter*{\listfigurename}%
                     \@mkboth{\listfigurename}{}%
                1783
                1784 (/book)
                1785 (*! book)
                     \section*{\listfigurename}%
                1786
                1787
                      \verb|\cmkboth{\listfigurename}{\listfigurename}||
                1788 (/! book)
                      \@starttoc{lof}%
                1789
                1790 (book) \if@restonecol\twocolumn\fi
                1791 }
     \l@figure 図目次の項目を出力します。
                1792 \newcommand*{\l@figure}{\@dottedtocline{1}{1\zw}{3.683\zw}}
 \listoftables 表目次を出力します。
                1793 \newcommand{\listoftables}{%
                1794 \langle *book \rangle
                1795
                     \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                1796
                     \else\@restonecolfalse\fi
                1797
                      \chapter*{\listtablename}%
                     \@mkboth{\listtablename}{}%
                1798
                1799 (/book)
                1800 (*! book)
                1801
                     \section*{\listtablename}%
                     \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
                _{1803}~\langle/!~\mathsf{book}\rangle
                     \@starttoc{lot}%
                1804
                1805 (book) \if@restonecol\twocolumn\fi
                1806 }
      \lotable 表目次は図目次と同じです。
                1807 \let\l@table\l@figure
                  10.2 参考文献
```

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。 元は 1.5em でした。
1808 \newdimen\bibindent
1809 \setlength\bibindent{2\zw}

thebibliography 参考文献リストを出力します。
1810 \newenvironment{thebibliography}[1]{%

1811 \global\let\presectionname\relax

```
1813 \(\article j \) \(\section*{\refname}\\\Cmkboth{\refname}\\\\
                  \vspace{1.5\baselineskip}
             1815
                  \verb|\subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname}|
                  \vspace{0.5\baselineskip}
             1817
             1818 (/kiyou)
             1819 (book)
                       \chapter*{\bibname}\@mkboth{\bibname}{}%
             1820 \langle book \rangle \quad addcontentsline\{toc\}\{chapter\}\{\bibname\}\%
                   \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
             1821
                        {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
             1822
                        \leftmargin\labelwidth
             1823
                        \advance\leftmargin\labelsep
             1824
                        \@openbib@code
             1825
                        \usecounter{enumiv}%
             1826
             1827
                        \let\p@enumiv\@empty
                        \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
             1828
                        \small
             1829 (kiyou)
             1830
                   \sloppy
                   \clubpenalty4000
             1831
             1832
                   \@clubpenalty\clubpenalty
                   \widowpenalty4000%
             1833
             1834
                   \sfcode`\.\@m}
             1835
                  {\def\@noitemerr
                    {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
             1836
                   \endlist}
             1837
    \newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。
             1838 \end{\newblock} {\hskip .11em\plus.33em\mbox{\cminus.07em}}
\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。 この定義は openbib オプションによっ
             て変更されます。
             1839 \let\@openbib@code\@empty
   \@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。 ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え, 余
             分なスペースが入らないように \inhibitglue ではさみました。 とりあえずコメントアウ
              トしておきますので、必要に応じて生かしてください。
             1840 % \def\@biblabel#1{\inhibitglue [#1] \inhibitglue}
       \cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが、 コンマとかっこを和文
             フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので、必
             要に応じて生かしてください。 かっこの前後に入るグルーを \inhibitglue で取っていま
      \@citex
             すので、オリジナル同様、Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。
             1841 % \def\@citex[#1]#2{%
             1842 %
                   \let\@citea\@empty
                   1843 %
                      {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
             1844 %
```

\global\let\postsectionname\relax

```
1845 %
          \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb}%
1846 %
          \ifOfilesw\immediate\write\Oauxout{\string\citation{\Ociteb}}\fi
1847 %
          \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
1848 %
            \G@refundefinedtrue
1849 %
            \@latex@warning
              {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
1850 %
            {\hbox{\csname b@\@citeb\endcsname}}}}{#1}}
1851 %
1852 % \def\@cite#1#2{\inhibitglue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \inhibitglue}
  引用番号を上ツキの 1)のようなスタイルにするには次のようにします。 \cite の先頭に
\unskip を付けて先行のスペース(~も) を帳消しにしています。
1853 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
       \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
1854 %
1855 % \def\@cite#1#2{^{\hbox{\scriptsize}}#1\if@tempswa
1856 %
       , \inhibitglue\ #2\fi}) }
```

10.3 索引

theindex $2\sim3$ 段組の索引を作成します。 最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
1857 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
1858
        \if@twocolumn
1859
          \onecolumn\@restonecolfalse
        \else
1860
1861
          \clearpage\@restonecoltrue
1862
        \fi
        \columnseprule.4pt \columnsep 2\zw
1863
        \ifx\multicols\@undefined
1864
1865 (book)
                \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
                \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
1866 (book)
1867 (! book)
                 \def\presectionname{}\def\postsectionname{}\%
1868 (! book)
                 \twocolumn[\section*{\indexname}]%
1869
        \else
          \ifdim\textwidth<\fullwidth
1870
1871
            \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
1872
            \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
            \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
1873
                  \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
1874 (book)
1875 \langle \mathsf{book} \rangle
                  \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
1876 (! book)
                   \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
1877 (! book)
                   \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
1878
          \else
                  \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
1879 (book)
1880 (book)
                  \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
1881 (! book)
                   \def\presectionname{}\def\postsectionname{}\%
1882 (! book)
                   \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
          \fi
1883
1884
        \fi
```

```
1885 (book)
                                                                     \@mkboth{\indexname}{}%
                                    1886 (! book)
                                                                         \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
                                    1887
                                                        \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
                                                        \parindent\z@
                                    1888
                                                        \parskip\z@ \@plus .3\p@\relax
                                    1889
                                                        \let\item\@idxitem
                                    1890
                                    1891
                                                        \raggedright
                                    1892
                                                        \footnotesize\narrowbaselines
                                    1893
                                                        \ifx\multicols\@undefined
                                    1894
                                    1895
                                                             \if@restonecol\onecolumn\fi
                                                        \else
                                    1896
                                                             \end{multicols}
                                    1897
                                                        \fi
                                    1898
                                                        \clearpage
                                    1899
                                    1900
                                                   }
                                   索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
            \subitem 1901 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\zw} % 元 40pt
                                    1902 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{2\zw}} \% \vec{\pi} 20pt
                                    1903 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\zw}} % 元 30pt
    \indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。
                                    1904 \end{\end} $$1904 \rightarrow 0^0 \end{\end} \end{\end} $$1904 \rightarrow 0^0 \end{\end} $
            \seename 索引の \see, \seealso コマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ see, see also
                                     という英語ですが、ここではとりあえず両方とも「→」に変えました。⇒ ($\Rightarrow$)
         \alsoname
                                     などでもいいでしょう。
                                    1905 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow\fi}
                                    1906 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow\fi}
                                         10.4
                                                           脚注
         \footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に 余分なアキが入るのを防ぐため、
                                   \inhibitglue を入れることにします。
\footnotemark
                                    1907 \let\footnotes@ve=\footnote
                                    1908 \def\footnote{\inhibitglue\footnotes@ve}
                                    1909 \let\footnotemarks@ve=\footnotemark
                                    1910 \def\footnotemark{\inhibitglue\footnotemarks@ve}
  \@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号∗を付けています。「注 1」の形式に
                                     するには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenext
                                      と合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。
                                           [2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。
```

[2013-04-23] 新しい pT_EX では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐため、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

- 1911 \renewcommand\@makefnmark{\hbox{}\hbox{\%}
- 1912 \ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%

「注1」の形式にするには次のようにしてください。

1913 \else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\fi}\hbox{}}

\thefootnote 脚注番号に* 印が付くようにしました。 ただし,番号がゼロのときは* 印も脚注番号も付きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって 下がりすぎるので変更し ました。

 $1914 \end{1} \label{lower.5exhbox{*}\colored} 1914 \end{1} \label{$

1915 % \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@注\kern0.1\zw\@arabic\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

1916 \renewcommand{\footnoterule}{%

1917 \kern-3\p@

1918 \hrule width .4\columnwidth

1919 \kern 2.6\p0}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

 $1920 \langle book \rangle \$ (chapter)

\Offootnotetext 脚注で \verb が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, TEX and TUG NEWS,

Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

1921 \long\def\@footnotetext{%

1922 \insert\footins\bgroup

1923 \normalfont\footnotesize

1924 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty

1925 \splittopskip\footnotesep

1927 \hsize\columnwidth \@parboxrestore

 ${\tt 1928} \qquad {\tt \protected@edef\\@currentlabel{%}}$

1929 \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark

1930 }%

1931 \color@begingroup

1932 \@makefntext{%

1933 \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}%

1934 \futurelet\next\fo@t}

1935 \def\fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\next \let\next\f@@t

1936 \else \let\next\f@t\fi \next}

 $1937 \ensuremath{\verb|left||} 1937 \ensuremath{\|left||} 1937 \ensuremath{\|$

1938 \def\f@t#1{#1\@foot}

 $1939 \verb|\def|@foot{\@finalstrut\strutbox\\color@endgroup\\egroup}|$

\@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。 **\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。 ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

1940 \newcommand\@makefntext[1]{%

1941 \advance\leftskip 3\zw

1942 \parindent 1\zw

1943 \noindent

1944 \llap{\@makefnmark\hskip0.3\zw}#1}

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。 著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext [0] {...} とすれば番号を付けない 脚注になります。 ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので, 工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
1945 % \def\@xfootnotenext[#1] {%
```

```
1946 % \begingroup
```

1947 % \ifnum#1>\z@

1948 % \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax

1949 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%

1950 % \else

1951 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%

1952 % \fi

1953 % \endgroup

1954 % \@footnotetext}

11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

[2012-04-24 LTJ] LuaTeX-ja では JFM に段落開始時の括弧類の字下げ幅をコントロール する機能がありますが、\item 直後ではラベル用のボックスが段落先頭になる ため、うまく働きませんでした、形を変えて復活させます。

\item 命令の直後です。

```
1955 \protected\def\@inhibitglue{\directlua{luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
```

 $1956 \left[41 \right]$

1957 \if@noparitem

1958 \@donoparitem

1959 \else

1960 \if@inlabel

1961 \indent \par

1962 \fi

1963 \ifhmode

1964 \unskip\unskip \par

1965 \fi

1966 \if@newlist

1967 \if@nobreak

```
\@nbitem
1968
1969
          \else
             \addpenalty\@beginparpenalty
1970
1971
             \addvspace\@topsep
             \addvspace{-\parskip}%
1972
          \fi
1973
        \else
1974
          \addpenalty\@itempenalty
1975
          \addvspace\itemsep
1976
1977
        \global\@inlabeltrue
1978
      \fi
1979
1980
      \everypar{%
        \@minipagefalse
1981
1982
        \global\@newlistfalse
        \if@inlabel
1983
1984
          \global\@inlabelfalse
          1985
            \ifvoid\z@
1986
              \kern-\itemindent
1987
1988
            fi}%
          \box\@labels
1989
          \penalty\z@
1990
        \fi
1991
        \if@nobreak
1992
1993
          \@nobreakfalse
          \clubpenalty \@M
1994
1995
        \else
1996
          \clubpenalty \@clubpenalty
          \everypar{}%
1997
1998
        \fi\@inhibitglue}%
1999
      \if@noitemarg
        \@noitemargfalse
2000
2001
        \if@nmbrlist
          \refstepcounter\@listctr
2002
        \fi
2003
      \fi
2004
      \label{makelabel} $$\ \sigma^{\mathbb{H}1}}\%
2005
2006
      \global\setbox\@labels\hbox{%
2007
        \unhbox\@labels
        \hskip \itemindent
2008
        \hskip -\labelwidth
2009
        \hskip -\labelsep
2010
        \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
2011
2012
          \box\@tempboxa
2013
        \else
          \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
2014
2015
        \hskip \labelsep}%
2016
```

2017 \ignorespaces}

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。 もともとの pIATEX 2ε は段落の頭に グルーが入る方で統一されていました。 しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。 そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。 しかし,ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので, また元に戻してしまいました。 しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので,ここでも最後にグルーを消しておきます。

```
2018 \def\@gnewline #1{%
2019 \ifvmode
2020 \@nolnerr
2021 \else
2022 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
2023 \inhibitglue \ignorespaces
2024 \fi}
```

12 いろいろなロゴ

IATEX 関連のロゴを作り直します。

\小 文字を小さめに出したり上寄りに小さめに出したりする命令です。

```
\上小 2025 \def\小#1{\hbox{$\m@th$%}
2026 \csname S@\f@size\endcsname
2027 \fontsize\sf@size\z@
2028 \math@fontsfalse\selectfont
2029 #1}}
2030 \def\上小#1{{\sbox\z@ T\vbox to\ht0{\小{#1}\vss}}}
```

\Tex これらは 1tlogos.dtx で定義されていますが、 Times や Helvetica でも見栄えがするよう

\LaTeX に若干変更しました。

[2003-06-12] Palatino も加えました(要調整)。

```
2031 \def\cmrTeX{%
2032
     \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2033
         T\ensuremath{\texttt{T}}\ensuremath{\texttt{E}}\ensuremath{\texttt{T-.125emX}}\ensuremath{\texttt{0}}
2034
         T\kern-.1667em\lower.5ex\hbox{E}\kern-.125emX\@
2035
     \fi}
2036
2037 \def\cmrLaTeX{%
      \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2038
         L\kern-.32em\上小{A}\kern-.22em\cmrTeX
2039
2040
      \else
         L\kern-.36em\上小{A}\kern-.15em\cmrTeX
2041
2042 \fi}
2043 \end{Tkern-.1em} wer.4ex\hbox{E}\kern-.07emX\end{0}
2044 \def\sfLaTeX{L\kern-.25em\上小{A}\kern-.08em\sfTeX}
2045 \ensuremath{\mbox{def\ptmTeX}}
```

```
\ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2046
2047
                     T\kern-.12em\lower.37ex\hbox{E}\kern-.02emX\@
2048
2049
                     T\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\d}
               fi
2050
2051 \def\ptmLaTeX{\%
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2052
2053
                     L\kern-.2em\上小{A}\kern-.1em\ptmTeX
2054
                     L\kern-.3em\上小{A}\kern-.1em\ptmTeX
2055
2056
               \fi}
2057 \ensuremath{\mbox{\sc loss}} 2057 \ensuremath{\mbox{\sc loss}} \%
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2058
                     T\kern-.2em\lower.5ex\hbox{E}\kern-.08emX\@
2059
2060
2061
                     T\ker_{.13em}lower.5ex\textstyle{E}\ker_{.13em}\0
               \fi}
2062
2063 \def\pncLaTeX{%
2064
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                     L\kern-.3em\上小{A}\kern-.1em\pncTeX
2065
2066
                     L\kern-.3em\上小{A}\kern-.1em\pncTeX
2067
2068
               \fi}
2069 \texttt{\qef}\plTeX{\%}
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2070
2071
                     T\end{T}\ T\kern-.17em\lower.32ex\hbox{E}\kern-.15emX\0
               \else
2072
2073
                     T\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath{\mbox\{E\}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensuremath}\ensure
2074
               fi
2075 \ensuremath{\mbox{def\pplLaTeX}}\
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2076
2077
                     L\kern-.27em\上小{A}\kern-.12em\pplTeX
2078
               \else
2079
                     L\kern-.3em\上小{A}\kern-.15em\pplTeX
               \fi}
2080
2081 \def\ugmTeX{%
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
2082
                     T\kern-.1em\lower.32ex\hbox{E}\kern-.06emX\@
2083
2084
               \else
                     T\end{Therm-.12em\lower.34ex\hbox{E}\kern-.1emX\0}}
2085
2086
               fi
2087 \def\ugmLaTeX{%
2088
               \ifdim \fontdimen\@ne\font >\z@
                     L\kern-.2em\上小{A}\kern-.13em\ugmTeX
2089
2090
               \else
2091
                     L\kern-.3em\上小{A}\kern-.13em\ugmTeX
               \fi}
2093 \DeclareRobustCommand{\TeX}{%
               \def\@tempa{cmr}%
2094
```

```
\verb|\footnote{ofamily}@tempa\cmrTeX| \\
2095
2096
      \else
2097
         \def\@tempa{ptm}%
2098
        \ifx\f@family\@tempa\ptmTeX
2099
           \def\@tempa{txr}%
2100
2101
           \verb|\footnote{ofamily}@tempa\ptmTeX| \\
2102
           \else
             \def\@tempa{pnc}%
2103
2104
             \ifx\f@family\@tempa\pncTeX
             \else
2105
               \def\@tempa{ppl}\%
2106
2107
               \ifx\f@family\@tempa\pplTeX
               \else
2108
2109
                 \def\@tempa{ugm}%
                 \ifx\f@family\@tempa\ugmTeX
2110
2111
                 \else\sfTeX
2112
                 \fi
               \fi
2113
             \fi
2114
          \fi
2115
         \fi
2116
      fi
2117
2118
2119 \DeclareRobustCommand{\LaTeX}{%
2120
      \def\@tempa{cmr}%
      \ifx\f@family\@tempa\cmrLaTeX
2121
2122
      \else
2123
         \def\@tempa{ptm}%
        \ifx\f@family\@tempa\ptmLaTeX
2124
2125
2126
           \def\@tempa{txr}%
           \ifx\f@family\@tempa\ptmLaTeX
2127
2128
             \def\@tempa{pnc}%
2129
             \ifx\f@family\@tempa\pncLaTeX
2130
             \else
2131
               \def\@tempa{ppl}\%
2132
2133
               \ifx\f@family\@tempa\pplLaTeX
               \else
2134
                 \def\@tempa{ugm}%
2135
                 \ifx\f@family\@tempa\ugmLaTeX
2136
                 \else\sfLaTeX
2137
2138
                 \fi
2139
               \fi
2140
             \fi
          \fi
2141
2142
        \fi
2143
      fi
```

```
\LaTeXe \LaTeXe コマンドの \mbox{\m@th ... で始まる新しい定義では 直後の和文との間に
                                                       xkan jiskip が入りません。また、 mathptmx パッケージなどと併用すると、最後の \varepsilon が
                                                        下がりすぎてしまいます。そのため、ちょっと手を加えました。
                                                      2144 \DeclareRobustCommand{\LaTeXe}{$\mbox{%
                                                                        \if b\expandafter\@car\f@series\@nil\boldmath\fi
                                                                    \LaTeX\kern.15em2\raisebox{-.37ex}{$\textstyle\varepsilon$}}$}
                                  \pTeX pTeX, pIATEX 2\varepsilon のロゴを出す命令です。
                            \pLaTeX 2147 \def\pTeX{p\kern-.05em\TeX}
                                                    2148 \def\pLaTeX{p\LaTeX}
                         \pLaTeXe
                                                      2149 \ensuremath{ \ensuremath{ \mbox{ }}} 149 \ensuremath{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ }}}} 149 \ensuremath{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ }}}} 149 \ensuremath{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ }}}} 149 \ensuremath{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ \mbox{ }}}}} 149 \ensuremath{ \mbox{ \mbox{
                            \AmSTeX amstex.sty で定義されています。
                                                      2150 \def\AmSTeX{\protect\AmS-\protect\TeX{}}
                            \BibTeX これらは doc.dtx から取ったものです。 ただし, \BibTeX だけはちょっと修正しました。
                            \SliTeX 2151 \% \@ifundefined{BibTeX}
                                                                                  {\def\BibTeX{{\rmfamily B\kern-.05em%
                                                      2152 %
                                                      2153 %
                                                                                     \textsc{i\kern-.025em b}\kern-.08em%
                                                      2154 %
                                                                                     T\ker -.1667em\setminus ex\cdot E}\ker -.125emX}}{}
                                                      2155 \verb|\DeclareRobustCommand{\BibTeX}{B\kern-.05em}| \label{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_loca
                                                      2156 \ifx\f@family\cmr\kern-.08em\else\kern-.15em\fi\TeX}
                                                      2157 \DeclareRobustCommand{\SliTeX}{%
                                                      2158 S\ker -.06emL\ker -.18em + 1/{I}\ker -.03em + TeX}
                                                              13
                                                                                初期設定
                                                             ■いろいろな語
            \prepartname
                                                      2159 \mbox{ newcommand{\prepartname}{\if@english Part-\else 第 fi}}
         \postpartname
                                                      \prechaptername
                                                      2161 \langle book \newcommand {\prechaptername} {\life denglish Chapter ~\else 第\fi}
\postchaptername
                                                      2162 \langle book \\ \newcommand \\ \postchaptername \} \\ \( \text{if Cenglish} \\ else 章\fi\)
   \presectionname 2163 \newcommand{\presectionname}{}% 第
                                                      2164 \newcommand{\postsectionname}{}% 節
\postsectionname
         \contentsname
   \listfigurename 2165 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
                                                      2166 \newcommand{\listfigurename}{\if@english List of Figures\else 図目次\fi}
      \listtablename
                                                      2167 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
                         \refname
```

70

\bibname

```
2168 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
2169 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
2170 \newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}
\figurename

\tablename 2171 \langle!jspf\\newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi}
2172 \langlejspf\\newcommand{\figurename}{\if@english Table~\else 表\fi}
2173 \langle!jspf\\newcommand{\tablename}{\tablename}{\table~}
\appendixname

\abstractname 2175 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
2176 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
2177 \langle!book\\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 IATEX で処理した日付を出力します。 ltjarticle などと違って、標準を 西暦にし、余分な空白が入らないように改良しました。 和暦にするには **\和暦** と書いてく ださい。

\today

```
2178 \newif\if 西暦 \西暦 true
2179 \def\西暦{\西暦 true}
2180 \def\和暦{\西暦 false}
2181 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
2182 \def\today{\%}
      \if@english
2183
        \ifcase\month\or
2184
2185
          January\or February\or March\or April\or May\or June\or
2186
          July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
          \space\number\day, \number\year
2187
2188
      \else
        \if 西暦
2189
          \number\year 年
2190
2191
          \number\month 月
          \number\day ∃
2192
2193
        \else
          平成\number\heisei 年
2194
          \number\month 月
2195
2196
          \number\day ∃
        \fi
2197
     \fi}
2198
```

 \blacksquare **ハイフネーション例外** T_{EX} のハイフネーションルールの補足です(ペンディング:

eng-lish)

2199 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}

■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```
2202 \ \langle \texttt{jspf} \rangle \texttt{\ headings} \}
2203 \pagenumbering{arabic}
2204 \footnote{olumn}
2205 \twocolumn
2206
    \sloppy
2207 \flushbottom
2208 \else
    \onecolumn
2209
2210 \raggedbottom
2211 \fi
2212 \if@slide
2213 \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}
    \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
2214
2215
   \raggedright
2216 \ltj@setpar@global
2217 \ltjsetxkanjiskip{0.1em}\relax
2218 \fi
 以上です。
```